

朝日のむかし話

朝日町ふるさとづくり運動実行委員会編

もくじ

はじめに..... 1

朝日のむかし話

小川のむかし話.....	小川	12
清水の神様.....	清水	16
三味坂の松つあん.....	下糸生	18
敵力倍.....	下糸生	21
烏ヶ岳の菊.....	下糸生	23
番神様の仏様.....	小倉	25
おじぞうさま.....	小倉	28
牛越のかたいカブラ.....	牛越	30
かわつばとおじいさん.....	横山	32
弘法大使と水.....	横山	35
ばかされた佐市さん.....	常盤	36
お産の神様.....	頭谷	38
雷よけの神.....	金谷	40
おぼけ岩.....	内郡	41
天王川の渡し船.....	内郡	43
散財山.....	内郡	45
江戸如来.....	内郡	47
鱈売り地蔵さん.....	朝日	49
二日堂と朝日の地名の由来.....	朝日	51
旅の人.....	西田中	54
多津女の遺徳.....	気比庄	59
気比庄のさんばく.....	気比庄	61
田中の仏田.....	田中	62
高尾山の仙人.....	天王	64
天王坂の地蔵さん.....	天王	70

シロの峰……………	栃川	73
天狗につれていかれたお梅さん…	栃川	77
乙坂の夏祭り……………	乙坂	80
守り地ぞうさま……………	乙坂	82
秀吉のイチョウの大木……………	乙坂	84
乙坂区のおいたち……………	乙坂	86
神玉と申樂のはなし……………	乙坂	89
明神堂のお岩さん……………	岩開	91
岩開の溜池……………	岩開	93
岩 永 梨……………	岩開	96
上川去の石神様……………	上川去	98

しあわせなわらじ旅

越前三十三番めぐり……………	朝日町	100
----------------	-----	-----

資料編

越の大徳 泰澄大師の一生……………	糸生	110
越知神社……………	糸生	112
大師と糸生……………	糸生	113
一、牛越、尾ノ上神社の祭神…	糸生	113
二、野末―葛野 経塚……………	糸生	114
三、小倉 蔵王山(蛇王山) ……	糸生	114
四、大谷寺家老職 安原五郎左エ門と小倉		
五、大谷寺 丸山……………	糸生	114
六、野田、野村家の家紋……………	糸生	115
七、窪中野 不動尊の清水……………	糸生	115
八、清水、侍の木峠、かくれ坂…	糸生	116
九、森、杖立、小金堂……………	糸生	116
十、小川、牛が窪、独鈷水……………	糸生	117
十一、小川、老婆と大師、殿池…	糸生	117
十二、真木、麻気神社……………	糸生	118
十三、天谷の鉱泉……………	糸生	118
大谷寺物語……………	糸生	119

糸生の伝説

一、横山と大城野	糸生	121
二、大畑の伝説	糸生	121
三、野末の生立ち	糸生	122
四、小倉、朝倉、義影と仏性寺	糸生	122
五、徳川吉宗と葛野	糸生	123
六、湯屋が谷	糸生	124
七、上糸生と八幡神社	糸生	124
八、糸生の歌舞伎	糸生	125
九、天谷陣屋、東二ツ谷金比羅山	糸生	126
ふせり行者	糸生	127
きよさだ行者	糸生	128
夜泣き石	糸生	130
ござん水	糸生	130
慶松堂	糸生	130
劍神社	境野	130
若宮神社	茱原	131
滝つぼの経文	茱原	131
源ヶ山	茱原	132
岩ヶ谷	茱原	132
からすが岳	頭谷	132
城ヶ谷	頭谷	133
二月十五日の祭	頭谷	133
秀吉のたばこ盆	頭谷	133
直線の村境	頭谷	133
鎌田屋敷	青野	133
城山	青野	134
鐘が淵	青野	134
寺屋敷	青野	135
おんぼ谷	青野	135
あなたが淵と布が淵	青野	135
佐々木家	青野	136
性付け坂	青野	136
音無川	青野	137
金谷茶がま	金谷	137
相撲取天保山	金谷	137

幸若音曲(舞)……………	西田中……………	138
朝日観音……………	朝日……………	139
阿弥陀如来由来……………	朝日……………	140
竜宮が淵……………	宝泉寺……………	141
産れ石……………	天王……………	141
飛鳥井桜(薄墨桜)……………	天王……………	141
尉が峰……………	栃川……………	142
篠虫神社……………	佐々生……………	142
碓鉄 鉦……………	佐々生……………	142
佐々牟志神社のヒイラギ……………	佐々生……………	143
佐々牟志神社の横穴……………	佐々生……………	143
飛鳥井雅縁……………	上川去……………	143
朝日町の区名のおこり……………	朝日町……………	144
むかし話が出てきそうな項目……………	朝日町……………	148
編集後記 ……………	……………	149

表紙 絵——加藤 惇
(大谷寺 大長院 蓮糸の曼陀羅より)
題 字——刀称 康隆
さし絵——田島 清博

小川のむかし話 (小川)

小川から山に入る林道を二百米程登ったところに「馬どめ」という所があります。そこは、大昔、日野山と越知山とが背くらべをし、どちらが高いかあらそった時、どうも越知山の方が、馬のひずめだけ低いことがわかりました。

或る時、えらいおさむらいさんが越知山に登ろうとしたところ、この馬どめのところまで来たところ、どうしても馬が進まず、仕方なしにおりて、馬のひずめとくらを山の頂上に向って投げました。ひずめは一番高いところに落ちて、その分だけ山が高くなり、村の人はやっとこれで日野山と同じ高さになったと喜んだと言うことです。でも本当は日野山の方が大ぶん高いのですが、昔の人は山の高さをはかることができず目ではかったので、こんな話が生まれたのでしよう。

それから、馬のくらは低いところにおちて、その時以来、その場所に水がでるようになり池になったと言われます。きっと今のこつている殿池、火山口のことを言っているのでしよう。

それから、上小川の神様から百米程登ったところに岩屋があります。そのところは岩の穴になっていて、昔、平家の落武者おちむしやがかくれていた場所だといわれています。

穴の奥に入ると刀や槍のさびたものがあるといわれていますが、でも誰も中に入った人はいないそうです。

また、小川のずっと奥の山にいのだいのだという所があります。そこに野村屋敷という所があり、それは岩穴と同じころ平家の落武者が住んだといわれています、現在の野村という姓の先祖になったといわれます。

次に天保八年てんぽに全国的に大凶作たいきょうさく、大飢たいきさんの年がありました。山あいにある小川です。今のようによい田もなく、本当にひどいもので食べるものは何もとれず、小川で百五十九人もが餓死がししたと言ひ伝えられています。その中に一家全滅いっかぜんめつした家が十軒もあつたといのですから、まるでこの世の地獄じごくだったのですね。

その頃かどうか知りませんが、小川のお寺のまわりには、くるみの木がたくさんあつて、村の人はそのくるみとりに行くとき、お寺で白いごはんをいただけたので、秋になるとくるみとりが楽しみで喜んでくるみ取りの仕事をしに行つたといひます。昔は、白い

ごはんは正月とお盆にしか食べることができなくて、ふつうの日は、ひえやなっぱをまぜてたいたごはんか、おかゆしか食べられなかったとのこと。それで白いごはんは大へんごちそうでした。

小川のしかのすけという力もちの話はこんな話です。

越知大権現おちだいこんげんさま様に千人力を授かるさすように百日の願をかけて毎晩お参りしました。ところが途中、大きな牛がねていたのでその牛をよけて通ろうとしたら、その牛が向って来たので、しかのすけは飛びついてたおしたら大きな岩になりました。きつとしかのすけの力と強い心をためされたのでしょうか。

百日の願が終わると本当に千人力の力が授かりました。喜こんだしかのすけは、家に帰ろうとするとあまりに力があるので、地面に足がうまって歩けません。さて困ってしまつた。しかのすけは、もとの自分の力にもどして下さいと願つたとのこと。

このしかのすけのことがお殿さまのお耳に入り、江戸で相撲すもうをとりなさいといわれました。しかのすけは江戸に出て相撲をとり、その頃の相撲とりをどどん負かしました。その時にもらつた金と銀でつくられているごへいが今でも大谷寺にあるときいています。

(資料) 小川 野村 幹夫

佐々木弘和

清水しようずの神様 (清水)

清水の神様はかた目です。昔、上糸生中の神様を今の八幡神社に合祀ごうししました。その時、清水の神様も上糸生の八幡神社にまつりました。

その神様の中で、かた目から血を流しておられるお方が清水の神様なのです。どうして片目になられたかというと、昔、清水におおくぼと言つた所がありました。そこに神様がおられたのですが、今神社のあるところに移りたいとおっしゃつたそうです。そこで神様は馬に乗って移つて来ました。ところがその途中に大きな梅の木がありました。梅の木にはとげがいっぱいあります。馬で通られた神様はその梅の木のとげに目をやら

れてしまい、たらたらと血が流れて、とうとう片目になってしまわれたといわれています。

それから後、そこを馬で通る時は、目をつくので馬からおりて通りなさいと書いた看板を出したといわれています。

それに今一つ不思議なこととして、上糸生地区の神様はみんな八幡神社に合祀されたと言われているのに、清水には、今でも八王子社として神社があります。それは、祭神だった薬師如来は八幡神社に納めましたが、その他にも神様がまつられており、その中に聖徳太子像、泰澄大師像もあるといわれています。それらの神仏をまつり、今なお氏神とされています。尚、この八王子社は他の神社とちがいで、わらぶきの屋根であり、文政七年（一八二三年）、今から百五十年前に建てられた古い神社です。

（資料）清水 川口実由紀

三味坂の松つあん さんまいざか（下糸生）

今から百年程前、下糸生に古崎松五郎という歌舞伎の役者がいました。村の人々から「マツツアン」と呼ばれて親しまれていました。この人は各地へ大勢の問弟を引きつれていき、糸生歌舞伎を演じて歩きそれはそれは有名でした。

この「マツツアン」も病気には勝てず、とうとうあの世行きになりました。三途の川を

渡って、地獄の入り口にたどりつきました。「マツツアン」を待っていたのは、こわい顔をしたエンマ大王でした。

エンマ大王は次々と死人の身元を調べ裁判をしていました。やがて「マツツアン」の番が来ました。

「お前はどこの生まれで、何という名じゃ。」

「はい、私は越前の国、丹生郡、糸生村、下糸生の生まれで、古崎松五郎と申します。」
「どんな仕事をしていたのじゃ。」

「はい、芝居の役者をしておりました。」

今まで、芝居の役者という言葉聞いたことのないエンマ様は、どんなことをするのか興味深げに尋ねました。マッツアンは、せりふはお手のもの、口からでまかせにペラペラと説明し、芝居とは人のまねをしてみんなを楽しませるものだと言いました。

「それはおもしろそうな仕事じゃ、では、わしのまねはできるか。」

と、まんまと松五郎の口ぐるまにのせられた大王の言葉に、マッツアンは「しめ、しめ」とよろこびました。

「え、もちろんできますとも。今すぐやってごらんにいれます。」

そして、アツというまに、エンマ様の着物と持ち物までとり変えてしまいました。

そして松五郎は今までエンマ様の座っていた大きな椅子にどっかりとすわりこみました。そしてマッツアンの着物を着たエンマ大王に向かって、松五郎エンマ大王は、大きな金棒をドスンとひびかせて、

「こら！そこのお前、顔を上げい！」

「お前は今まで大変に悪いことをしてきた。一番罪の重い地獄に行ってしまうえ。」
と言って、大王を地獄へほうりこんでしまいました。

それで今のエンマ大王はマッツアンであり、下系生は言うに及ばず、系生村の生まれの死人は、すべて極楽へ行かせてくれるという話です。

あまりにも芝居がうまかったので、死んでもきつとこんな技をみせるかも知れないと門弟達の話に花が咲き、後の世まで長くつたえられたのではないかと思えます。

門弟達が大先生、松五郎師匠を偲んで「古崎翁」と名づけて建てた立派な墓が、今も野田と下系生の間の道すじにまつられています。

(資料) 下系生 松山 茂信

野村 洋子

敵力倍てきちばい（下糸生）

むかし、むかし下糸生に、それはそれは力の強い男がおりました。男の名は伍作ごさくとい
います。伍作は自分の力をとつても自慢じまんにしていました。その頃は今のようきんごうきんざいに機械もな
く、力の強い人が人から頼りにされる時代なので、村の人はもちろん近郷近在きんごうきんざい、そして
武生あたりまで、力もち伍作の名が伝わりました。

ところがその頃、武生の町にも大変力自慢をしている男がいました。その男は、下
糸生の伍作のことを聞き、ぜひ力くらべをしたいと思い、手紙を書き、使いの者にもた
せて試合を申し込みました。

さて驚いたのは伍作です。試合を断ることもできません。そこで、
「よろしい、試合をたのしみしています。」

と使いの者に返事をしました。返事はしたものの伍作は心配になりました。こんな小さ
な下糸生の村ではいばってられるが、大きな町武生の一番の力もちには負けてしま
うのではないかと思い、不安で仕方ありませんでした。

そこで、越知神社に毎晩お参りして「敵力倍」といって敵の二倍の力を授かるよう
願をかけました。願が通じてか、伍作の力は段々と強くなり、力くらべが近くなった頃
には、伍作が歩いた後は、道がへっこんでしまい、石の橋でも落ちてしまう程でした。

伍作が歩くと地面がビリビリと地ひびきをし、家の中に入ると床が抜けてしまいました。
こうなるとまた大変です。伍作は力強くなりすぎて困りました。いくら力くらべで勝
ったにしても、この調子では村の人や家の者に迷惑をかけてしまいます。そこで伍作は
考えなおし、力一ぱいがんばって試合をし、それで負けても仕方がないと思い直し、翌
日からは、敵力倍の願をやめ、どうぞもと通りの自分にして下さいとお祈りをしました。
越知大権現もさぞかしびっくりされたことでしょう。

いよいよ力くらべの日が来ました。おかげで、力は元どおりになった伍作は、あるだ
けの力をふりしぼって力くらべをしました。そして伍作は勝ちました。武生の男も立派
な人で伍作さんを大変ほめて帰ったとのことでした。

からす

鳥が岳の菊 (下糸生)

下糸生の東の方にそびえている鳥が岳は、大昔から色々と歴史と関係の深い伝説が残っている山なのです。それは山には水も出るし、どこから見ても頂上が見えにくいし、頂上からは下の様子がよく見えるという、戦いには大変都合の良い山だからでしょう。

この話もその一つかも知れません。木曾義仲きそよしなかという武将がおりましたが、その家来に鎌田太郎という人がおり、義仲が滅ほろぼされるとひとりだけこの地にのがれて来て、永い間この山に住みました。

そしてこの鳥が岳の山中に菊を植えられ、死ぬまで育てられたといわれています。亡くなる時に、

「自分は死んでも、菊はなくならないように。」
と遺言を残されたといえます。それから永い年月、野菊でなく赤、白の花が咲き続けて来ました。

戦後食糧難せんごしょくりょうなんの時代に、この山を開墾かいこんしましたが、この菊を絶やしては、故人に申しわけないと思い、今の中学校の前の畠に植かえて育てました。でも土地が違ってか何年か咲いていましたが、何時のまにかなくなりました。本当においしいことだと思います。
鎌田太郎かまたたろうという人は歴史的には不明な点も多いのですが、しかし、菊を愛する心のゆかしきが長く名を残し、そしてまた、その美しい心の願いが永い間あの山中に咲く菊に通じたのではないでしょう。今でも鳥が岳のどこかに可憐な菊がひっそりと咲いているのではないでしょう。

(資料) 下糸生 古崎みよ子

ばんがみさま

番神様の仏様 (小倉)

このお話は、おばあさんから聞いた六十年程昔のお話です。

その頃、小倉の村はずれに水車小屋がありました。小倉の人がかわるがわるこの水車

で米をふんだり、わらをかったりしていました。或る晩のこと、ひいおじさんとひいおばあさんがお米をふむため、袋につめた米をかついで暗い夜道を水車小屋に急ぎました。私（おばあさん）はちょうちんを持ってついて行きました。

途中、ふと見ると、田んぼの中でキラツと光るものを見ました。不思議ふしぎだと思っていたのですが、やはり光るように見えます。昔はよく、へびの目が光るといわれていてこわいなあと思ひ急いで行きました。

ひいおじさんは、水車小屋に入ると、うすの中に米を入れ水車をまわして帰りました。帰るときは光るところを見ないで帰りました。

よく晩もまた、水車小屋に行きました。やはりその田んぼのところまで行くと、昨夜さくやと同じところにピカツと光るものが見えました。それでひいおじさんに、

「あそこに光っているもんがあるほら。」

と言いました。ひいおじいさんは急いでひろいあげて見ました。円い形をしています。どうも仏像らしいのです。

翌日、村の人々に見せますと、

「これは仏像じゃ、どこかにまつらにやばちがあたる。」

といわれ、後ろの山に小さいお堂をたててまつりました。

それから今まで、番神様まつりを続けてきています。きっとその仏様のおかげか、それ以来、火事は一度もなく「塔の前」の守り神となっています。

（資料）小 倉 安井幸市朗

野村 康広

おじぞうさま（小 倉）

私の家は小倉です。家の近くにお地蔵さまが昔からまつってあります。そのお地蔵さまのすぐ横に一軒家がありました。

昔、その家の人が、ある日のこと、お地蔵さまの前をこやしの桶をになって、一日中行ったり帰ったりして畑にこやしをやりました。

すると、その夜、その人が急に熱を出して苦しみ出しました。家の者が心配して医者
にみてもらいましたが、熱はさがらず大変困っていました。そこでよく考えてみますと、
一日中、くさいものになって地藏さまの前を通ったからではないかと考え、翌日、早速、
お地藏さんをきれいに洗いました。すると不思議にぐんぐんと熱がさがり苦しみもとれ
ました。

(資料) 小倉 堀田 るみ

牛越のかたいかぶら(牛越)

こんどは牛越のお話です。むかし、むかし、やがて冬をむかえようとしている寒い日
に、一人の貧しいみなりをされたお坊さんが来られました。腹をすかせておったのでし
よう。せつせとおいしそうなかぶらをとっているおばあさんに出あい、

「おいしそうなかぶらですね。一ついただけないでしょうか。」

とたのみますと、このおばあさん欲ばりなのか、

「この辺のかぶらはかとうて食べられません。」

と云ってことわりました。

それからは牛越でとれるかぶらは本当にかたくて、味が悪いといわれています。

(資料) 野田 松田ますみ

かわっぱとおじいさん(横山)

大昔の話です。或る天気^あのよい日、横山の畑で一人のおじいさんが一生けんめい草む
しりの仕事をしていました。そこへ、一匹のかわっぱが現われ、おじいさんを見るなり、
「一つやだをしてやれ。」と思い、かわいらしい子どもに化けました。

「おじいさん、草むしり手伝ってあげようか。」

と言いました。おじいさんは急に見たこともない子どもが話すので、ちょっとおかしいぞと思いましたが、

「そうか、そうか、では手伝ってもらおうか。」
と言って喜んで手伝ってもらいました。

かわっばの子どもは「しめ、しめ。」と思い、おじいさんのまわりを草をむしるかっこうをして、目に見えないなわでぐるぐるとおじいさんをまっつうていきました。

おじいさんは、初めからおかしいと思っていましたので、目には見えないが、体がしまるのに気がつき、「ははあ、かわっばのいたずらだな。」と思い、かわっばにわからないように、大きな桑の木の株に見えない縄なわを引っかけて知らん顔をして仕事をしていました。かわっばはそれを知らず、しばらくすると姿をけしてしまいました。かわっばは川におり、下からなわを引っ張り、おじいさんを川にころがし落としてやろうと思い、ぐいぐい引っばりました。でもさっぱりおじいさんはころがって来ません。腹をたてて力一ぱいひっぱると、なわがかけてあった桑の木がこげてどーっと落ち、それがかわっばに当りひどいめにあったとき。

(資料) 小倉 野村 佳代

弘法大師と水 (横山)

むかし、むかし、その頃大へんえらいお坊さんだった弘法大師こうぼうだいしがこの辺をおまわりになりました。夏の暑い日でした。弘法大師は横山を通られました。大変のどがかわいたので、働いていたおばあさんに、

「のどがかわいて困っています。どうぞ水を一ぱいいただきたい。」
と頼みました。おばあさんは仕事がいそがしいからか、

「この辺はおいしい水は出ません。となりの牛越うしこえでもらってください。」
とことわりました。ところが、ふしぎなことに、それからは横山はいくら井戸をほっても水が出なくなり、仕方なく川の水を使ったといわれ、牛越では喜んで水をあげたので、

どこをほってもおいしい水が出るとのことです。

(資料) 牛越 高田 智恵

横山 五島 育美

小倉 野村 佳代

野末 五島かおり

ばかされた佐市さん (常盤)

常磐狭から江波へ通じる道があります。昔はやぶ原で谷はうす暗い気持のわるい所で、人は通れませんでした。そこには、キツネの夫婦と尾のない子ギツネがすんでいました。

織田の佐市魚屋さんは毎日ここを通過して、常磐の在所へ魚のふれ売りに来ました。

ある日のこと、此を通った佐市さん、あたりのきれいな山々の紅葉を見ていますと、

「魚屋さん、今日はうまい魚がありますか。」

と呼びますのでふりかえって見ると、美しい小娘さんがりっぱな門先に立っています。

こんな所にこんな門がなかったのにおいながら、娘さんにおいしいカニとカレイの魚を渡しました。娘さんから何枚もの札金をもらい、佐市さんの財布はぼんぼんにふくれて大喜びで家へかえりました。晩のごはんをすませてから、

「今日はへんな日だった、まるで夢を見ているような気持。どれ！財布の金はどれだけ

ぐらいか勘定しよう。」

と楽しみにヒモを解いて見ましたら、お金は一文もなく、けやきの赤葉が一ぱい。

「やあ！キツネにだまされた。小娘は子ギツネだったのかー。」

佐市はへんな気持ちになり、それからはここはもう通らぬことにしました。

文 西田中 岡山次三八

(参考文献) 常磐郷土誌

お産の神様（頭 谷）

頭谷の八幡神社に三体のまつり神があります。その中の一体は昔からお産の神様として信仰が厚く、在所では難産で困ったことはありません。

二月十四日には毎年、前年に出産された家から米一升を持ち寄って、若者の手でおにぎりを作り在所の者が食べると、ご利益でお産が軽いとの伝説があります。

在所のある若者が都会に出て易者に伺ったところ易者は、

「おん身は健康体でない。幼時に他界すべきであったが、在所の神様のおかげで現在生きているのだ。」

と申されたので、間違いなく鎮守の神様のおかげと知り、在所へ帰って八幡神社の境内に唐獅子一基を建ててお礼を申し上げたとの事です。

話 頭 谷 水野伊右エ門
文 西田中 岡山 次三八

かみなり

雷よけの神（金 谷）

金谷の住吉神社の境内に雷よけの神様がまつってあります。この神様のおかげで昔から在所には落雷はありません。

このご神体は、昔洪水の時、上流から流れ着いた神様で、在所の者がひろいあげ、大事にまつりました。

上流の江波の村人はこれを聞きこんで、

「まつられたご神体は江波の神様だから、ぜひもどしてほしい。」

とたのみにきました。金谷の在所ではがんとしておうぜず、今日におよんでいるとのことです。

話 金 谷 吉田 正志
文 西田中 岡山次三八

おばけ岩（内 郡）

内郡の五箇用水かようすいの川上かわかみ二丁ちようばかりの所に竜宮りゆうきゆうつちゆう深い淵ぶちがある。ほこからもう二丁ほど上にいけい（大きな）岩がある。天王川のまん中にちようどいけいガマが川上にむいてちよこんとねまっているんてなかつこの岩や。うららは昔からおばけ岩ゆうていた。あの岩は、昔はもつと川下にあつたんにやちゆうことや。なんでも三国から天王川を登ってきたつちゆうもんもある。大水が出たときに水の力で岩のまへのべと（土）や石などがほれて岩の後へたまるんにや。ほやであの岩の後にはいつも島がひつついてるんにや。大水が出るたんびに岩の前がだんだん深こうなつてある時「ごとん」と岩が前へひつくり返えるんにや。ほんな事が昔からなんべんもあつたもんやさけ、あの岩はだんだん川下から登ってきたつちゆうことや。うららのちちええい時は夏になるといつも天王川につかつてたもんや。おばけ岩のあたりはひどう深かつたけど水の底まで見えなもんや。アユぐれいっばいいいなー。

今は林道があるけどむかしはおばけ岩のあたりは崖がけんなつて、細い道が今よりづつと上の方についてたんにや。たくもんをかついで通るとおとろしかった。うららはどこでもぐつて、じゃこめ（さかな）をちやめたけど、おばけ岩の下のうろたにはもぐつたことがねい。おなじが悪いとちようど岩がかやつてくる時にむかうとあかんぞ。「おめらも、おばけ岩の下へはもぐつたらあかんぞ。」

文 内 郡 三上伊三男

天王川の渡し舟（内 郡）

内郡の徳万橋とくまんばしのところは、むかしは橋がなくて、渡し舟で渡っていました。内郡、宝泉寺、天王の人達ばかりでなく、糸生の人達もこの渡し舟を多く利用していました。

この渡し舟せんどうの船頭せんとうさんは、清八せいはちさんという人でした。清八さんは、内郡、宝泉寺、天王の各村（現在の区）と糸生の村から、船頭さんとしての給金（お米）をもらつて、毎日人を運んでいたのです。

でも、大雨のあとで川水が増すと、とても流れが急になるので、舟を出すことができませんでした。急いで対岸へ渡りたくても、舟が出せないのですから、渡ることができません。

村の人達は、大変困り、ここに橋を作る相談をしました。文政十一年、今から百五十年前のことです。

木の仮橋を作ることは相談がまとまりましたが、橋ができると、今まで長い間船頭さんをつとめてきた清八さんは、仕事がなくなってしまうです。仕事がなくなると、給金がもらえないので、生活に困ります。

そこで、村の人達は、橋をかけるのを七年間とし、この七年間は、今まで通り、清八さんに給金を出すことにしました。

やがて、仮橋ができ上がりました。雨が降っても渡ることができ、村の人達は大変喜びました。清八さんも、給金は今まで通りもらえ、生活に困らず、大変喜びました。

文内郡 竹内 弘美

散財山さんざいやま（内郡）

丹生高校の横の、町の水道タンク南側の山を、村の人達は「散財山」と呼んでいます。

今から五十年ほど前、ここに茶屋風の小屋が建ち、ここでお酒を飲んだり、歌ったりして、大いに楽しむことができました。小さな料理屋さんができたのです。

何しろ、ここは大変見はらしのいい所でしたし、一円持って行くと、芸者さんが出てきて酒が飲め、帰りにはおり箱のおみやげまであったので、しばらくはとてもはやりました。

でも、こうして遊んではかりいることもできません。お酒を飲んでは散財さんざい（むだ使い）していたのでは、生活が苦しくなります。それで、だんだん、この料理屋さんもはやらなくなりました。そして、五、六年後には、ついにこの料理屋さんは、なくなってしまうました。

ところで、ここは、今から千六百年ほど前の古墳なのです。とても大きな古墳で、長

さが、七十三メートルもあります。形から、この古墳は、「前方後円墳ぜんぽうこうえんふん」と呼ばれていま

す。千六百年も大昔の人達も、ここがあまりに見はらしのいい所だったので、当時の豪族こうしゆのお墓おはかを作ったのでしよう。

先にお話した料理屋さんも、この場所があまりに見はらしがいいので、料理屋を始めたのでしようが、実は、大昔のお墓の上に小屋を建てていたのです。

ここが古墳だとわかったのは、料理屋さんがなくなってから、二十五年ほどたってからでした。

文内郡 竹内 弘美

江戸如来えどによらい（内郡）

天保の昔、在所は飢饉ききんが何年も続いて、お上かみへ納める年貢ねんぐはもとより、毎日のたべ物にも苦しんでいました。

在所の藤五郎さんはお寺やお宮さんを建てるえらい大工さんでした。

「わたしはこれから江戸へ大工仕事にいつて一生懸命働いて成功して、在所のお上へ納めねばならぬ年貢をみんな引き受けましょう。」

と約束して江戸へ立ちました。

それから三年の間は約束通り年貢の金を送ってくれました。在所のものは大喜び、

「藤五郎さんは、在所の神さまじゃ。」

と拝おがみました。

ところが四年目からは音沙汰おとさたがふつつり切れて、お金はもう送ってくれません。在所のものは困り果てて、在所の代表に江戸の藤五郎さんをさぐりにいつてもらうことになりました。

代表は江戸に着いてさっそく藤五郎さんをたずねました。すると藤五郎さんは、一年前、病気で亡くなったことを知りました。息子さんは、

「父の約束を果たせないのは本当に申訳がございません。お許しください。その代と
いっては何ですが、父が生前名高いお寺からゆずっていただいた家宝がありますから
持ち帰って、在所のものに話して下さい。」
と言いました。

こうして渡されたのが二幅の掛物。在所の代表は大事に持ち帰りました。在所のものは涙を流して、藤五郎さん親子の厚い真心を喜び軸をお開きしました。有難い仏様の
姿、伏し拝みました。そして江戸如来となえました。

それから内郡在所の宝物として今に伝わり、年々宮番が交代で大切に護り続けてい
ます。

藤五郎さんとその母の二つのお墓は在所のお寺の上り段の右側にあります。

文 西田中 岡山次三八

資料 内郡 竹内弘美著「江戸如来について」

鱈売り地蔵さん（朝日）

朝日の観音さんの段下のお堂に地蔵さんがまつてあります。むかし浜の魚屋さんは
魚のふれ売りに毎日早起して浜をでました。そしてこのお堂のあたりで夜があげ始め
ますので、それから在所をふれ売りにまわるならわしになっていました。ある日、お堂
に着いた魚屋さんが時を間違えたのか、なかなか夜があげません。

堂内に入れていただいたが、疲れがでてぐっすりねこんでしまいました。そしたら地
蔵さんが現れて、

「これ魚屋さん！あなたは毎日早うから休まずやって来て感心だ。どんなに疲れるだろ
う。今日はあなたに代わって魚を売って来てあげよう。」

へんな夢を見ました。不思議な夢だったと思いつつ魚のかごを見たら、一匹の魚もな
く、お金がかごのわきにのせてありました。

それからこの地蔵さんを鱈売地蔵としてみんなが信仰しています。

文 西田中 岡山次三八

（参考文献）越前・若狭の伝説

二日堂と朝日の地名の由来（朝日）

（旧暦二月二日（現三月二日）に行われて来た祭事）

むかしむかしその昔、朝日は具谷村ぐだにむらと称しようしていたころ、毎年のようにこの地区あくまに悪魔が現れて、田畑を荒し農産物はほとんど穫とれない状態が続き村人をこまらせた。そこで村人は毎年毎年生れて二才になる幼な子を悪魔に捧さかげること、難なんをのがれることが出来るとと信じて、それを行なっていた。

そんなある時、泰澄たいちようだいし大師様が、この地方にお見えになり、事情をお聞きになり非常に立腹りつぷくされて、退治たいじすることを誓ちかわれた。間もなく悪魔の洞窟どうくつをさがし当て、それから毎日洞窟の入口に通ってお教を上げ、二十一日目にようやく退治され村人を安堵あんどさせた、その日が二月二日であった。

ちようどその時、洞窟の周辺に生い繁しげっていた楠木くすのきのある一本から光明こうみょうを放はなしているのが発見され、これを立木のままで身丈一丈の聖観音像せいこんのんざうを彫刻ちようこくし、お性入おしょういれのお教を上げると白豪はくしやうから光明を放した。この明りが朝日が照らすのごとく近在まで輝いたので、この地を朝日村と名付け改称された。今から千二百数十年前のことです。

あまりのうれしさに村人は観音様の前で酒盛さかもりをして喜び祝ったといわれます。その後このことが祭事として最近まで続いていました。宮当番みやとうばんが酒・さかな・モチはぎぼうそして萩棒はぎぼう（一尺五寸）百本を観音様の祭壇さいだんに飾り時の住職じゆうしやくさんがお教を上げながら、お参りしている村人に対して後向きの姿勢で萩棒を投げると、御堂に集まった村人はそれを拾ひろって床ゆかを打たたいて悪魔退治のしぐさをしながらお酒を飲み、踊りながら祭事を祝った。このとき打たたいた萩棒は四つに割れるとその年はまゆが豊作になるといい伝えられ、それぞれが家の神棚かみだなに飾ったともいわれています。近年では省略されて一部の人がお参りし、お酒をいただく程度にとどまっています。

旅の人（西田中）

むかし、東の村と西の村のまんなかにきれいな小川が流れて、在所のもんは、大事な飲水のみみずにしていました。

東の村のおうめおばさんは、朝はようお茶水くみに、くみばしよおに下りようとしていました。

ほいたら橋のそばに、いけい男がきたない身なりでたおれていたので、びっくりしてかけあがり、隣となりのおきくおばさんやおまつおばさんをよばってよく見ると、死んでいるらしい。

「お生月の元旦にこんなきたない死人を見るのでは今年はえんぎが悪い。はよう橋の先の西の村へうつそう。」
といて、三人で運び知らぬ顔で、そつとうちへ帰りました。

西の村の市兵エさんが在所の神様へ一番のりに初詣はつまいりしたと家をでたら、いけいたない男が倒れているではありませんか。さわって見ると死んでいるらしい。早速となりの仁吉さんや三右エ門さんを大声でよぶと、

「なんだ、なんだ。」
と在所じゅうのもんが集まりました。

「かわいそうに旅のもんらしい。元旦というのに気の毒だ。」
おばあさん達はお念仏を申して涙を流します。

そこへ在所のひげの重吉おじいさんがきて、

「どこの何右エ門さんかわからんが、西の村の在所で死ぬとはよっぽどこえんに縁がある人と思う。どうでしょう、この在所のもんとして、葬ほうむって上げたら。」
若い者もとしよりも女も男も、

「それはよい、それはよい。」
と話はきまりました。重吉さんは、

「それは有りがたい。私にまかせて下さるか。」
「お願いします。」

「それでは皆さん、これから家うちへもどられて、朝のごはんをすませて、準備に集まって

ください。七平さんと久太郎さんはお寺へ行って、ご院主さんに頼んで下さい。法名も忘れないで。新屋さんと力松さんは作織に縄帯姿で橋のたもつから、佛を戸板にのせて重吉さんの家の会場に運びました。

湯かんの湯もわいた。佛の白衣も縫うた。六文銭も用意できたので、八畳の一間で湯かんにかかることにしました。重吉じいさんは線香に火をつけて待っています。

「いけい男だ。腹が特別大きいなあ。」

帯をとくとびつくりするのもあたりまえ、着物と帯の間からいかい財布がでてきました。

「中にはよつぽど仰山の金や札がはいっているらしい。これは大事な物だから重吉さんに預づかってもらいましょう。」

おん坊が重吉おじいさんにさしました。そのうちにご院主さんが見えになる。

同行もそろった。お火があがって、葬式がはじまりました。ありがたいお経が上る。在所のたくさんのお焼香お念仏の声で、おごそかな式も終わりました。みんな三昧(火葬場)までお見送りして帰りますと、重吉さんのご挨拶がありました。

「皆さんのおかげで葬式も事なくすみました。仏も往生してあの国で喜んでいて下さるでしょう。これから皆さんの前で預った財布を調べましょう。」

開く財布をみんながかたずを呑んで見えています。開く重吉さんもびつくり。中から大判・小判・札・白金・赤金、何百両何千両ともわかりません。重吉じいさんは、

「ここには届ける役所もないし仕方ない。私の考えではこの在所は二、三年この方悪作続きで台所もみんな苦しいとの事ですからどうでしょう、分けあって貸していただいたら?。」

「耳よりな話、勿体ない、勿体ない。どうぞよろしくお願いいたします。」
と在所の者は頼みました。

それから一年目から在所の家はどこも暮しが楽になりました。重吉さんは皆の人を呼び、

「皆さんのお力で葬式をして上げた人は、只人ではなく、仏様であったと思います。どこの家でも台所が楽になったとの事、旅の人のおかげです。この厚いご恩を忘れないため、地藏さんを刻んで在所の三昧に建て、おがませていただいたらよいと思

ますが。」

在所の一同の者は、

「いい事です。すぐ手をつけて下さい。有がたい、有がたい。」

その年のお盆に立派な石の地藏様が三昧に建てられました。それから新しい線香やお花が絶えません。三昧はなくなったので近年お寺の門前に地藏さんがうつされました。でも毎年新しい盆がきますと、嫁さんや娘さんの手で作ったよだれがけ、わけさ、ぼうしを地藏様に着せて上げます。

そして、今でも毎年地藏様の前で祭をして、お経やご詠歌をあげ、在所中のもんがご恩を報酬しています。

文 西田中 岡山次三八

たずめ 多津女の遺徳（氣比庄）

元龜元年、朝倉義景公の奥さんが安産を祈るため越知山へ参られました。帰る道氣比庄の村で産気づき途方にくれていました。

幸い氣比庄の在所には多津さんという助産に慣れた女がおられたので、さっそく雇い入れました。間もなく奥様は玉のような愛王丸を生まれました。

多津さんは無欲で真心をこめてお世話したので、公も奥さんと共に感謝され、

「望み次第の褒美を取らせるから何なりと遠慮なく申しなさい。」

と言われました。

多津さんは、

「何の望みもございませんが、ただ氣比庄の在所は昔から山林がありませんので、薪や炭に困っていますので、なんとかお願いができませんでしょうか。」

と申上げました。すると、

「それはいとやすい望みだ。はるか西に見える山、今鳥が飛んでいる範囲の土地を渡そう。なおそこへ通う道は思う存分取るが良い。」

とのご返答ができました。この土地こそ糸生鳥ヶ平からすがたいらで氣比庄の区有地として、今に伝わっています。

明治の時代になって在所の人は多津さんの徳をほめて、氣比神社の境内けいだいに碑ひを建て、愛丸さんの生れた場所（青山九右エ門さん屋敷）には胞衣ほういの跡として標石をたてました。

話 氣比庄 齊藤仁兵衛

文 西田中 岡山次三八

氣比庄さんばく（区有山林）

朝倉義景公あさくらよしかげこうから拝領はいりょうの山林は、鳥ヶ獄からすがだけの南側、糸生村の横山区大城野の方で、他人交らずの一六町歩あり、茶原区の鞍ヶ谷の奥に個人持ちの山林が七町歩程あった。

氣比庄信用組合が昭和二八年頃から経営不振のため、吉江の高島仲右衛門さん、田中の進士仁右衛門さんへ反当たり時価二万円のところを金一万五千元でその一六町歩を売却した。

まだ、各家庭は大きい囲爐裡いろりに割木わるきや柴しばを焚たいていたので、後になりさんばくさんばくが無いのは困るといので、個人所有の七町歩の山林を区が買い受けた。それで手間の有る家は、毎年苅り倒し持ち帰っていると、昭和四〇年頃の氣比庄の人の話だった。

なお区は、総人足で、さんばくさんばくの谷間に立っている杉の木の下刈りをするので、年に一度大勢の人が毎年来られる。

いずこも出稼でかせぎで忙しくなり、燃料も保温にも電気やガスを各戸が使用する昨今、山の柴は不用になったので四七、八年頃には杉苗を何万本も持ち運ばれて植樹された。

文 茶原 国兼 栄

田中の仏田 (田 中)

ほとけだ

天台宗薬王寺に背の高い弥陀如来がまつつてあります。むかしこのお寺へ泥棒がしのびこみ、ここの仏像は珍しいと聞いている。盗み出してひともうけしてやろうと御堂から背負って田んぼ道を逃げました。沖田まで出るとどうしたとか、足腰が立たず、からだじゅうが痛みだし苦しんでいました。

在所の者がこれを見つけ、

「仏様のぼちでそんな身体になったのだ。早くお寺へ返しなさい。二度とそんな不心得な事はよしなさい。」

ときびしくさしました。

それから、この土地を仏田ということになりました。

話 田 中 竹間 盛柔

文 西田中 岡山次三八

たかおやま

高尾山の仙人 (天王)

春もあさい日、山太郎は家族をつれ、米や味噌を用意して、山小屋へのぼっていった。

それから、ひと月あと一番窯が焼きあがった。これは、おはつの品物、里方のお寺さんへ届けよう。

要所、要所に、地藏さんが立ってござる天王坂。山太郎は背中に手をやり、炭をかぼうて坂を落ちるように、降りてきた。

お寺につくと、どっこいしよで腰を落とし、やれやれで、つなをゆるめる。ナラの木を焼いた一級炭、山太郎はこはいに積み上げ、つくづくかえりみる。

春の彼岸も近い。

降ってきた仙人のうわさ

山太郎がかえってから、村のなかに、へんなうわさが流れだした。

「高尾山に、仙人がいるって、のう。」

「いかな！誰からききなした。」

ま顔で、ささやきあう村人たち。うわさは炭火がはじくように、四方へひろがっていった。

高尾山の由来

むかし、むかしの名づけの神、天王村や牛越村を見てあるき、

「やあ、これは、これは、しっぽの高い山！高尾山と名づけよう。」
できまったそうな。このへんでは親ぶん格の山。

てっぺんから手前が天王村、向うがわが牛越村だ。里方と山方をつなぐ往来は、この山のねきをかすめている。

休み場「バンバ」

高尾山のねきは、バンバ、バンバと親しまれて、みんなの休み場になっていた。

炭の荷を両腹にしぼりつけた駄馬だばも、あらい息を、ここでしづめたし、思い材木を背おった山男たちも、つかのまの立話をたのしんだ。

「山太郎どん、炭はけなない、のう。荷はかるいし、ねだんは重いし、のう。」

山男らは、川と流れる汗をしぼって、うらやんだ。

「なんの、なんの。荷はかるう見えても、いっぺんこけたら最後、炭は折れる、こことはきく、きつう、ねぎられるし、のう。」

いつもきく、ひとのボタモチの話。

骨折りのはげしさも、つくづく察しられる。

山太郎、仙人を見かける

高尾山に春かすみがかかり、雑木林はいつせいに芽をふく。山ざくらは、ほころびそめた。山小屋で仕事におわれる山太郎、一服した。汗をふき、腰をたたき、背をのばす。はるか高尾山に目をやると、

「あれ!。」

「あれ何んだろう?。」
のさげび声。

山太郎の目にはいったのは、髪かみぼうぼうの老人、飛ぶより早く尾根にわたり、遠見の松にきえた。

さては、話に聞く仙人、あれだ。松葉がメシ、藤の皮がキモノという仙人にちがいない。
い。

山太郎は、ひとりきめした。

まぼろしの仙人いずこ

春はどんどん色づいて、山はワラビ、ゼンマイのさかり。里方からは、家族づれがおしかけて、どこの山も鳴った。高尾山の近くは、足あとでいっぱいという。

まぼろしの仙人見たさだろうが、一人の口からも、見たという話はきかない。

夏がすぎ、秋がきた。こんどはコケ取りの一だん、ヤマイモ掘りの男衆でにぎわったが、知らん、知らんの声ばかり。

うわさも下火になり、山は冬に入った。

高尾山に行者の立札

冬が去り、春がきた。バンバも黒い地はだがでて、カゲロウが見える。そんな時、高尾山のふもとに、餅もちまきの立札たてざがたった。それには、行者のしよめいがあった。立札には、

禅定満願 天地報恩 餅撒勤行 彼岸中日 於高尾山 行者

ぎょうをするため 高尾山に入って 一年のまんがんをむかえた

ぼくよく、むそう、さむ、だんじきのぎょうができたのは

天地神明のおかげ ほうおんのため 餅まきをしたい

お彼岸の中日 高尾山へ きてください ぎょうじや

追われる山太郎

朝が早いという評判の山太郎は、夜あけ前のうす明りのなかに、この立札を見つけた。

山太郎は用心ふかく、立札に近よる。棒立ち、無ごんで、三十分がたち、四十分がたつても動かなかつた。だんだん、あたりが白みかけると、山太郎の姿は、見えなくなつた、という。

行者を仙人と見あやまつた山太郎のトガを、佛力によって、はらい清められた、とあとの人は信じている。

行者さん、おめでどう

村人たちが、指折りまつた行者さんの餅まきはきた。お彼岸の中日、この日は遊び日でもあり、朝から天王村・宝泉寺村・牛越村・横山村・大畑村から高尾山へと押しかけた。

村人たちは、さじきの上の若い行者さんを、この人だ、と自分の目で確めた。

「よかつた、のう。」

「めでたい、こつちや、のう。」

ささやく群衆の頭へ、餅がふつてくると、歓声が上がって、谷々にこだました、という。

天王坂の地藏さん（天王）

むかし、東の在所に喜右エ門さんという、めつぼうごしやう後生ねがいのおじいさんがいました。おじいさんは若い時から、日本国中の名高いお寺やお宮さん、それに高い山などを修業にまわって歩きました。

ある年、仲よしの友達に、

「おい！うららの百姓の田植えもすんだのじゃで、気候もよいし、肩休めに越中えつちゆうの立山さんへ修業にのぼろうかいの。」

「それはいいのー。」

と友達二、三人で話はきまりました。

いよいよ用意もできたので、うちのもんにはひまをもろうて、何日もかかって立山さんに着きました。そしてあつちの谷、こっちの峰と泊り歩き修業しました。ほいたら岩と岩との間からきれいな温泉が湧わきでていて入浴できる格好かっこうの所に出あいました。

「何日もお湯へはいらないので一ぺんつかわせてもらおー。ああいい気持ちじゃ、地獄じじくで仏とはこの事じゃ、何日の疲れも一ぺんに取れてしまう。越中では立山、加賀では白山、する河の富士山日本一だよ。」

唄うたもできました。

「長湯していい気持ちになった、そろそろ上がろうかいの。」

友達は上りかけました。喜右エ門さんも上がりとうしましたけどどうしても湯つぼから上がれません。友達が手を引き腰をおし上げてもらうていだめです。

とうとうあきらめて、喜右エ門さんが、

「うらはこの世でおかした罪が深いのでこの始末。ここで終わります。みんな世話になったのー。どうか在所へと帰ったら在所のもんにも、うちのもんにも喜左衛門は立山さんの湯つぼの中で終わったと。そしてうらの着物のそでを片方ちぎってうちのもんに渡して下さい。それから罪ほろぼしに西の方角のところへ三体じせうの地藏さんを建ててまつて下さるよう、みんなに頼んで下さい。たのみます。さようなら、さようなら。」

友達はつらい別れをして在所にもどり、喜右エ門さんの言葉を伝えました。

今ある天王坂の地藏さん、横山と武生にある同形同体の地藏様がこの方だとのことだ

す。

話 天王 佐々木利右エ門

文 西田中 岡山 次三八

シロの峰 (栃川)

栃川には、畑時能はたときよしのこもったといわれる城跡しろあとがある。すなわち茶白山城跡ちやうやま、尉ヶ峰城じょうがみね跡がそれである。

昔から、盆の十三日（八月十三日）には、ムラの若い衆や子ども達がその城跡にのぼって、

「シロの峰さまに、火をあげよう……。」

「シロの峰さまに、火をあげよう……。」

と、たいまつをかかげ、火をあげました。

くる年も、くる年も、火をあげては村はずれの通称「砂もり」という川のへりまで持つていきました。

しかし、城跡であげたいまつをムラ中ひいていくので、かえって危あぶないということになり、庄屋さんは、たいまつをあげることを禁じました。

すると、ふしぎなことに、禁じた庄屋さんの家の池のあたりから火が出て、たちまち燃え広がり、栃川全体が火のうみとなり、ほとんどの家が焼けてしまいました。

ムラビト達は、ただぼう然として燃えつくしていく自分達の家をどうすることもできませんでした。

そして、

「シロの峰さまに火をあげなかったからだ。」
と大さわぎになりました。

それからすっかりこわくなったムラビトは

「シロの峰さまに、火をあげよう……。」

「シロの峰さまに、火をあげよう……。」

と毎年八月十三日には火をあげていました。

それからしばらく平穏へいおんな日が続き、ムラビトは自分達の家の再建に力をいれていました。

何年かの年月が流れ、太平洋戦争がはじまりました。若い人はだんだん戦争に出ていき、ムラには若い人が少なくなってきました。

それと共に、また、

「シロの峰さまに、火をあげよう……。」「
の声は聞かれなくまりました。

しかし、近年になって地区の心ある人の中から、

「伝統を守ってたいまつをあげることを復活しては……。」「

という声も上がりました。

そこで昭和五十三年八月十三日から、また復活させることになりました。

文 栃 川 前田 美智子

(参考文献) 福井県の伝説

天狗てんぐに連れて行いかれたお梅うめさん (栃 川)

北の在所の仁右エ門のおうめ嫁よめさんは、小さい時から働き者で、今日も山辺の畑へ仕事にでました。ところが晩になっても帰ってきません。だんだん暗くなったので、うちのもんは提灯ちようちんもって畑へ迎えに行きました。何べん呼んでも返事も姿もありません。親類のもんも来て、山辺や畑、杉林をさがしたけれど、やはりいません。とうとう夜が明けました。

あくる日から近くの在所の人たちを頼たのんで、山中やまじゆうさがすことにしました。

「昔からこのへんには天狗てんぐさんがいるとのこと、きっと天狗さんがつれていったのだ。」
という話もできました。

鐘かねや太鼓たいこ、ブリキのカンをたたいて、

「天狗さん！早ようおうめさんをかえして下さい。」

と呼びながら、竹やぶ原、杉の森、松林を探しまわりましたが、山彦の声がはね返るばかり、みんな力を落しました。

在所の竹松さんが何気なく在所の熊野社くまのやしろのお堂の中をのぞいて見ると、だれかがいるようだ。でも雪囲ゆきこいはしっかりとしてあるし、カギもきちんとかけてある。不思議だと思いつながら、カギをはずしてよく見ると、おうめさんに間違まちがない。

「おーい！みんな来い。おうめさんがいたぞー。」
と大声でさけびました。

みんな集まって喜びあい、おうめさんを救いだし、
「どうしてここにいたのだ。腹もへったでしょう。」

とたずねましたが、おうめさんは、ぼかんとして何の返答もありません。おんぶうちして家へつれてかえり養生したので、だんだんからだはもとのようになりました。でも畑や山であつた事は誰にも語らなかつたとの話です。

在所のもんは、それから山には天狗さんがいるというので、だれも山へ行かなくなつたといひます。

話 栃 川 橋本三右エ門

文 西田中 岡山 次三八

乙坂の夏祭り (乙坂)

乙坂の夏祭りは、昔から八月十一日にきまっています。この日はめつたに雨が降つたことがないそうです。

昔ある時に若衆が庄屋さんの所へ行き、

「十一日は都合が悪いので、三日ほど早めにさせてくれ。」

とたのんだそうです。すると庄屋さんは腹を立て、

「ぜったいに日をかえてはいけない。」

といひました。若衆はしかたなく家に帰りました。

ある日庄屋さんは、鯖江の殿様の所へ用事があって、出かけて行きました。夜暗くなって家に帰る途中、石田の村のはずれまで来ると、乙坂のお宮さんで、大ぜいの人が踊っている声が聞こえて来ました。庄屋さんは、腹を立て、あわてて家に帰り、神様にのぼって見ますと、何んと上には一人もいません。庄屋さんは家に帰り床に入りました。しばらくするとうしろの山の上から、ごろごろと大きな石がころがるような音がしました。庄屋さんは又、腹を立てて外に出て見ると、大きな黒い男が立っているではないか。おのれと思い刀を持って来て、その男を二つに切ってしまいました。夜が明けたので外に出て見ると、何と夕べの男は見あたりません。夜二つに切ったのは、自分が大事にしていた白樺しろつばきの木だったのです。

この年は、庄屋のいうことも聞かず、若衆は十一日に祭りをしなかったそうです。するとその年には、大風が吹きお米もとれず悪作の年だったそうです。

それから今日まで、乙坂の夏祭りは八月十一日と日をかえさず続いているそうです。

話 乙 坂 木下ふじ子

文 乙 坂 清水 達意

守り地ぞうさま (乙 坂)

昔、乙坂の若い衆が、夜遊びの帰り道、足につまづく物があつたそうです。あたりが暗いので、手に取ってよく見てみますと、石で造つた地ぞうさんではありませんか。手にだっこして村の中まで持って帰つたそうです。家に持って帰つてもどうもならんし、道の片すみにおいて帰りました。家にかえって皆んなに話をすると、

「それはいかん、早くあつた所へかえして来い。」

といわれ、又ひろつた所へかえしに行きました。

そして、二、三日たった時、この間おいた所に又、もどっていました。皆んなは、この地ぞうさんは、乙坂が好きなんだろうと思い、その場所へ小屋を建ててあげたそうです。

それから後、乙坂の地区はだんだん栄えて来たそうです。今では村の人達は前を通る時は、ひとりでに頭が下るようになりました。

話 乙坂 木下ふじ子

文 乙坂 清水 達意

秀吉のイチヨウの木（乙坂）

織田信長という人は仏法がきらいで、福井にはとどころにお寺があつたので、吉崎よしざきをはじめ板取いたとり（今庄町）あたりから越前を中心に、八百人のけらいを使って次々に寺を焼きはらつたそうです。

その時、乙坂の庄屋はたまらなくなつて母親を背負つて、越知山へこもつたそうです。その弟は村人をつれて、乙坂山の岩カベいわかべというところにあるおおきな、ほらあなの中にかくれたそうです。正月になつても何のたべものがなく、夜のうちにソツと山からおりてきて、畠はたけにカブラがあつたので、それをおぞうにかわりに食べたのだそうです。そのしきたりでおぞうの中へはカブラを入れるのだそうです。

まもなく信長は明智光秀あけちみつひでにころされ、光秀もしばらくのうちにころされました。信長がころされた時、やっと寺を焼きはらうのはやみました。それまでに山にかくれていた人はみんなころされてしまったそうです。越知山へこもつた兄さんが帰つて見ると村人もいないし、それはみじめな風景でした。

あとにたつたのが豊臣秀吉とよとみひでよしで、その人が乙坂の風景を見にきて、乙坂にはきれいな水が出るところがいくつもあるのです、自分が来た記念に小さなイチヨウの木を水のでる真上の山に植えたのだそうです。それが今では大きなイチヨウの木となつて残っています。

文 乙坂 木下三郎右エ門

乙坂区のおいたち（乙坂）

乙坂という村の名は、今から千七百余年前の大和時代やまとにこの村の神玉こうたまというところに、息長丹生真人いきながにゅうのまひとという王族おうぞくが住んでおられ、またその方の王女乙坂姫（正式には忍坂姫）

が、申樂さるがくというところに住んでおられました。

その後乙坂姫は允恭にんぎょくてんのう天皇の皇后こうしうとなられてこの地を去られたので申樂というところを村の人のために与えられました。村人は大変喜んでここに石像せきざうを建て姫を祀まつりました。また、村人たちがこの地を利用して商市を開いたところ、大変繁盛はんじようしたので、それからここを市姫宮しひめぐうというようになりました。また、慶長三年、大閤検地たいごうけんちのときにもここは乙坂とびちの飛地とびちとされました。その後、日本各地に郡名、村名ができるようになったとき、息長丹生真人の名から丹生郡と名付け、乙坂姫の名から乙坂村と名付けられたといわれています。次に明治になってから、乙坂村は朝日村乙坂(区)となりました。

そのむかし乙坂村に貴い王族おうぞくが住んでおられました。その王族が亡くなられたので、村の北方、稲場いなばの山に石のからと(石棺)せきかんを造って葬ほおむったという伝説があります。そして、それより約千数百年たった、大正九年三月中旬ごろ、稲場の山をくずして天王川の堤防ていぼうを造るため、トロツコで土を運ぶことになりました。その時現在地より十二、三層高いところの土をくずしていきますと、当時の地上より二、三層ほど地下から石が十二個でてきました。一つの重量じゅうりやうは約八十貫かんから百貫ほどで、石のからの断面を見るように並べてありました。その石を下までころがして置いておきました。その当時乙坂の千秋伊兵衛家の息子で、正ただしという人が軍隊ぐんたいで亡なくなったので、その時西田中の孝久治郎兵衛さんが庭造りを請負うけおい、その石を庭石にわいしとして使い、その石全部とほかの石とで三十九個使いました。からとを発掘した時、乙坂の古老のお方が私を呼んで、この石はまさしく王(息長丹生真人)を葬ちがむったからとに違ちがいと私にいつて聞かせてくださいました。

文 乙 坂 千秋多四郎

こうだま さるがく 神玉と申樂のはなし(乙 坂)

今から千七百年ほど前、大和時代(古墳文化のはじめごろ)やまと こかん 應神天皇の第四皇子おうじん おおじであつた稚渟毛二俣王わかのげ ふたまたのおおという皇子が乙坂に住んでいました。

この皇子は、別の名を息長丹生真人いきながにゅうのまひとといたしました。

大へん偉い方で、この地方の発展のためにいろいろつくられたそうです。

皇子が住んでおられた館やかたは、神玉殿かみぎよぐでんといって村の西の方にありました。広い屋敷やしきで二〇〇メートル四方もあったそうです。

このところは現在畑はたけになっていて、村の人たちは神玉こうたまと呼んでいます。

又、丹生郡という郡名は、この息長丹生真人の名から名付けたといわれています。このことは足羽社あすわしやき紀や日本紀略にほんきりやくという書物にも書いてあります。

息長丹生真人の王女に乙坂姫（正式には忍坂姫）という姫があつて同じく乙坂に住んでいました。

この姫の館は申楽殿さるがくでんといって村の南の方にありました。今、村の人が猿楽島さるがくじまといっているところで村の飛地ひぢになっています。

乙坂姫おつかひめが後に允恭天皇にんぎょくてんのう（天系系図第十九代）の皇后こうごうになられてこの地を去られてから館跡地やかたあとちを村の人に与えられました。村の人たちは喜んでこゝを社地せぢとして石像せきざうを建てて姫をお祀まつりしました。

その後、村の人たちがこの社地を利用して商市を開いたところ大変繁盛はんじょうしましたので、それからここを市姫宮しひめみやというようになったといえます。

石像は今もこゝに建っていて、のぞき込んで見ると千六百年余の風雪を話しかけてくるように見えます。

又、乙坂という村の名は、こうして乙坂姫が住んでおられたところから姫の名を用いたといわれています。このことは允恭記という書物にも書いてあります。

文 天 王 内藤庄左エ門

（資料）木下三郎右エ門家由緒記

明神堂のお岩さんみょうじんどう（岩 開）

岩開を東西に走る道、青野―鯖江線があります。この道は、昔から越前町と鯖江市を

結ぶ行商の道として利用されておりましたが、この道の岩開の山（鳥越坂）の中腹に明神堂と言う水神さまがあります。

この明神堂には前記の溜池の造成開始の安政時代（一八五〇年頃）、クワで土を掘っていたら、クワが石にあたり、この石から、赤い血が流れ出て来たので、これは水をよぶ岩だ、あるいは雨をふらす岩だと言うことで掘り上げ、現在の明神堂に置かれ、以来、水神さまとして、区民を始め、広く信じられているわけです。今日まで、この岩を雨ふり、雨ごいの神さまとして、干ばつや、水のほしい時に、おまいりすると、雨をもたらしてくれたと言い伝えられ、岩開には雨がふり、他の地区にはふらなかつたと言われております。毎年、七月二十四日にはこの明神堂で、近くの山を下刈りしたタキギを集めて、火まつりが今もなお行なわれております。

ここ七十年間にも、干ばつが何回かあり、区民がこの明神堂で、短くて十日間、長いのでは四十日間もの雨ごいを五く六回したと言われている。

文 岩 開 織田驥世次

岩開の溜池（岩 開）

現在岩開には、大三ツ、小一ツの計四ツの溜池があります。昔から岩開には、四六〇石（約三二町歩）の水田がありますが、水田の用水が少なく、和田川（昔は八田川）の水を佐々生、宇田でも水田の用水のために、上流でセキ止めるために、用水の水が不足し、佐々生、宇田、岩開（岩永、開発）には、たえず水争いがあつたそうです。天保時代（一八三〇年頃）にも、和田川をセキ止めるので、岩開の人が用水がほしいために、現在の武生市の本保の代官所へ依頼して、公平に水があたる様に、毎年交渉した公文書が今も残っています。

こうしたいきさつのなかで、安政時代（一八五〇年頃）に、岩開の内藤清太夫さんが美濃の国（現在の岐阜県）へ行った折に、山の谷を活用して、溜池を造り、冬の雪水を貯水し、春に水田の用水として利用している現地を見られ、感銘し、こうした溜池をぜひ岩開に

も造らなければならないと思われ、早速美濃の国から溜池づくりの、技師や職人を連れて来られ、岩開の現地を下見してもらったところ、技師や職人は、この地形は、溜池を造るには最適地だと言われ、在所の人に相談したところ、いろいろと意見が出て、なかなか決まらず、本保の代官所へ相談に行ったところ、

「在所でやれ。」

との断が下されたそうです。

しかし、在所のなかには、反対意見もあって、なかなか話が進まず、しかも美濃の国から来た溜池づくりの技師や職人を帰えすことは出来ず、多少の意見はあったが、内藤清太夫さんの裏山に小さな溜池を造ることになった。しかし在所の人の協力が得られないので、又、本保の代官所の人に溜工事の人足として出るよう説得をしてもらい、しぶしながらも協力し、人足として出る様になり、溜造りの工事を開始したそうです。丁度この頃にこの地から、現在の明神堂（雨ごい神さま）にあるお岩さんが出土した訳です。

こうして在所の人の協力が得られて、工事が開始すると、在所の人は、せっかく溜池を造るのなら、貯水力のある大きな溜池を造るのが良いと言うことで、だんだんと大きくなり、現在の溜池の規模のようになったと言われております。

しかし、工事中の溜池を大きくすることに反対する一部の人は、仲間をさそって、内藤さんの山の大きい杉の木を、五十本位、根まし切りをして（おんねんばらし）反対運動をしたことも言い伝えられ、溜工事をする事の難しさを物語っています。

しかも、美濃の国から来た、技師や職人の経費や、在所から出る人の人足賃が無いために、内藤さんは自分の水田を売ってこれにあてられたそうです。

こうして、カジヤ溜が出来ると、水田への用水のありがたさがわかり、次いで銚ヶ谷溜^{かじやだんだめ}、白山溜、新溜を造って岩開の水田に水をうるおした訳です。この外に溜水は、飲料水、洗水、防火用水として今も尚^{なお}、区民に利用されております。

いわながなし

岩永梨（岩開）

岩永（現在は岩永と開発が合併して岩開）には昔から、「岩永梨」と呼ばれる梨が、各家の圃りに、必ず数本（三〜五本）植えられており、秋の果物として食べられ、その名は広く伝わっていた。そもそもこの梨がいつ頃から、家の周囲に植えられたかは定かでないが、およそ一五〇〜二〇〇年位昔からあったと言われ、今でも何本かは残っています。

この梨は、岩開の土地に非常に適したことで、各家の宅地が広がったことも、広く普及した原因とも言われており、大きくなると、背丈ほどにも高くなり、又、非常に沢山の梨が収穫され味も良かったために、各家で植えられたものです。

この岩永梨には、盆梨、水梨、茶ワン梨、霜梨等の種類があり、特に水梨が風味が良く、多くの人がながいあいだ親しまれました。

また、これらの梨は各家で食べるだけでなく、吉川村、豊村（現在の鯖江市）の方から、各家で収穫した梨はもちろんのこと立木になったままの梨を一本五円ぐらいで買ってくる、必要に応じて収穫し、売っていく方法で、秋まつりの場売り（エンニチ）の販売品として売られたこともひろく知れわたった一因であると言われています。

さらに、この梨の木が大きくなり古木になると、ツゲのクシの代用物として加工されたり、サクラの木の代用物として、エン板、シキイ、カモイ等の建材物としても利用された訳です。

こうして利用されたことで、梨の病虫害が発生したこと、富有柿が導入され始めたために、次第に新植されることなく、「岩永柿」は姿を消していった訳です。

文 岩 開 織田驥世次

上川去の石神様（上川去）

むかし在所のまん中に、いかい岩石がありました。ある年大火事がありました。その時岩石が邪魔になったので、力持のもんが上の方をはつり取ろうとしました。ほいたら

不思議な事に、その割目から赤い血がたらたらと流れ出ました。みんなびっくりして、「これはただの石ではない神の宿やどっておられる石だ勿もったい体ない事をした。」みんなひざまつってあやまりました。

それから何年もたつて、どつかあらたな所へ石神様を移そうと相談がまとまりました。すぐ神主さんにおはらいをして頂いて神様にお伺いしますと、よろしいとのことでありました。

そこで在所の男も女もみんな出て、春日神社のやしきへおうつしました。中には田地の二反も神様の財産に寄付するもんもできました。

それから、毎年十月二十四日にお祭りをして、神様の田地からとれた物でご馳走ちせうをして神様に供え、在所のもんもみんなご相判しょうばんに預あずかって奉謝ほうしゃし、今日までずっと続いています。

話 西田中 月田 政吉

文 西田中 岡山次三八

しあわせなわらじ旅 越前三十三番めぐり

老人 雨祝あまいわいだけが休みだった昔にくらべると、六日働いて一日休んだユダヤ人は、進んでいたのう。今は週休二日制も、はやってきた。さて、次の休み、どこへ。

子供 ぼくらとは、ずれがあるんだ。それ、だいぶ我慢がまんしてくれたんで、次はまかせるよ。

老人 そうかい。じゃ、おどろくな。三十三番札所ふたじよめぐりだ。——なに、西国へいごくかって？
いや、いや、そうではない。足もと、福井、つまり越前えちぜんの国三十三番札所だ。そのまた、朝日町の札所だ。

子供 えッ、それほんと？おへんろさんの。

老人 お前も灯台とうだいもと暗くらしじやのう。

一番 金堂 朝日町大谷寺

へ この世より

こがねの堂にまいりつつ

仏のみかげ

おがむなりけり

二番 越知山大権現 朝日町大谷寺

へ おちこちの

たつきも知らず

わけのぼる

峰の嵐の

法の音かな

三十番 朝日山福通寺 朝日町朝日

へ よしあしを

わかさず照す朝日山

平等大会の

じひの光は

三十三番 越知山大谷寺 朝日町大谷寺

へ 今朝までは

みぞじあまりの

札の数

うちおさめぬる 大谷の寺

子供 いい声だ。そんなの、いつできたの。

老人 そうだなあ、ざっと五〇〇年前頃か。

子供 どういうわけで。

老人 わが国に仏教が入ってきてから、越前に泰澄たいちようだいし大師という名僧が現われ、あれた国土をよくし、仏教をひろめ、方々に寺をたてる。それから、ずうつとくだつて、最澄さいしちようや空海くうかいや道元どうげんや日連にちれんが現われる。この頃になって、仏の教えについての研究も進み、いろいろな宗派しゅうはというものが生れたつちゆうわけだ。

いままであった寺や、その寺のかだん家は、どれかの宗派に入ることになる。この時だ。越前では、その昔、泰澄大師と深い深いむすびつきのあった寺々は、宗派をこえて、いつまでも手をつなごうではないか。

これが札所の動機どうきと置いていい。

さて、その日がきた。二人は宿堂行のバスを上系生ですてて、大谷寺川ぞいに歩きたす。

老人 道はすこし上りになるが、急がんでもいい。山を見ながら話そう。

大師は奈良朝時代ならちようじだいでなあ、仏教がはいつてから五〇年ほどあとだ。その頃は神仏かみぶつこんこうの風習ふうしゅうも流れていたし、国土こんしも原始げんしのおもかげが残っていた。山や谷あいには、自然のダムが水をたたえていたし、平地は湿地しつちや沼ぬまばかり、アシが茂しげっていた。大雨がふると川は暴れあばまわり、人はこ高い山で焼畑やきはたをしていたという。

子供 大師はそこで生れたの。

老人 福井市、三十八社の三神家みかみけの二男坊だ。今の泰澄寺は昔の名なごりで、始めの建物は三十八社の堂どうや社やしろがならんでいたという。

子供 子供の頃はどんなふうだったの。

老人 よく、尋ねてくれた。

センダンふたばは双葉ふたばよりかんばしいというが、その顔や姿も、遊び方もふつうの子供とちがっていたという。子供の群ぐんからはなれて、粘土ねんどで仏像ぶつぞうをつくったり、木の

杖で塔をこしらえて、よろこんでいた。これは、孔子こうしの子供時代にかよっているのう。

どうだ、分るかい。

子供 それから。

老人 少年が十四才になると、自分から、ひとりで、雪の日も雨の日も越知山かよいを始める。

修行しゆぎょうのために。

少年の母はたいへん心配し、吉江よしえまでむかえにでて、落合おちあいの渡わたしから帰ってくる少年を立て待っていたという。立待村たちまちむらの起おこりだ。

子供 こちどと大分ちがう。それから。

老人 父、三神みかみさんは少年のひた走りの意気いきに感動して、大谷寺を建てた。この大谷寺こそは、少年にとって根本道場こんぽんどうじょうであり、いろいろな修行をして成長していった。また、ここをねじろとして、越前の国を見てまわり、水耕や畑作ができるよう、出水でみずで川が暴れぬよう人々と相談して導みちびいた。

仏像をほり、寺を建て人々が安心して一生を送れるよう、仏の教えをひろめた。

子供 おじさん、なかなかくわしいね。

老人 上げあんでもいい。

大師は神護景雲元年三月、大谷寺で八十六才の輝く一生をとじた。

聖武天皇から「泰澄大和尚位たいしやうだいおしょうい」を贈おくられ、人々の崇敬のまとなったのだ。

大谷寺についた二人は、三つの霊場れいじょうの前に、深々と頭を下げた。その短い時のきざみのなかに、遠い大師の面影おもかげにふれ、心豊かにさつさと山を降りていった。

急ぎ帰りのバスをつかんだ二人は、内郡うちぐんで降りる。辻つじを旧道きゆうだうへ向い、朝日観音へと登った。

老人 朝日の観音さま、知ってるだろうな。

子供 知ってるよ。お正月に、みんなと詣まいってるもん。

夏の民謡まつりにもいく。

老人 そうだったな。ここが、三十番の札所だ。朝日山・福通寺。

子供 その、札所ってどういう意味。

老人 看板のある霊場ということだが、昔の人はお詣りにきたしるしに、用意してもつてきた札を、建物の高いところへ張って帰る。納札というが、これもふくんであるようだ。

子供 ああ、見た見た、柱の高いところや、天井に、きれいな札だったよ。

老人 福通寺は、朝日観音と呼ばれているが、それは、泰澄大師ご自身の観音さまがご本尊だからだ。また、この観音さまのご開眼のとき、のぼる朝日のような光明を放ったという。

朝日山というのはここからきたそうなの。

この付近には、大ぜいの悪者がいて、人々は不安な生活をしていたというが、大師によって平定された。しかも大師は、こういう危険な仕事をされても、平気で空ふく風、「濟世には雲水の枯淡」の気持ちだったという。むずかしいかな。

子供 観音さまは？。

老人 慈悲ふかい仏さまだ。

巡礼歌にも「よしあしを、わかさず照す朝日山。」とあるとおり。庶民に人気のある仏さまでないか。

子供 この辺、変わったなあ。

老人 戦前、初参りや縁日には人々でうまり、この道は歩くのもよういでなかった。縁日には夜店がたつて、焼きまんじゅう、氷水、ちよつと一杯が景気をあおっていた。なつかしい。

子供 それが、どうしてこんなに。

老人 栄枯は移る。なんとかいうだろう。いや、それでない。知らぬが仏。知った以上、三十番の霊場は再び人々から仰ぎ見られる。その日は近いだろう。

資料編

越の大徳 泰澄大師の一生

泰澄大師は、福井県の古い歴史上の人物として、また僧侶として唯お一人のお方であります。郷土の大偉人として福井県はもちろんのこと、石川・富山、新潟そして滋賀県にまで行脚され、仏教をひろめ、山を開かれ、川を治められ、産業を盛んにされ、そして寺院の建立、仏像彫刻と、人間一代の仕事としては考えられない程の遺跡と伝説を残され、北陸一円の人々のために献身的に働かれた方です。そのため世の人々から「越の大徳」として永く千二百年後の今日でも敬慕されておられる方なのです。北陸の方々が仏教の信仰厚く豊かな生活を送られるのも大師のおかげだと思います。

その「越の大徳」と慕われる大師が、この糸生地にて、十四才より二十一才まで七年間大谷寺、越知山を中心に修行され、老年、七十七才より八十六才、亡くなられるまで九年間、大谷寺を信仰の中心とされ、数々の歴史、遺跡、伝説を残され、そして大往生、この地に永遠に眠られておられるのです。それでは、泰澄大師の一生をお話しましょう。

大師は、今から千二百年の遠い昔、天武天皇、白鳳十一年六月十一日（六八二年）今は福井市になっている、三十八社の地に生まれました。父親は三神安角（やすずみ）、母親は伊野家から嫁がれた桜姫とうたわれた美人であったといわれています。大師が誕生された日は、六月中旬というのに、夜中から白雪が舞い一面の銀世界に清められたとのことです。

大師は小さい頃から、他の子どもと遊ぶことを好まず、一室にとじこもって泥で仏像を造ったり、読書で日々を過し、人から神童といわれていました。

大師が十一才になられた頃、道昭といわれるえらいお坊さんが、この地に立ち寄り、大師を一目見られ大変驚かれ、ご両親に「この子は、あなたの子どもさんではありません。この子は背に円いご光がさしています。きっと仏の生まれかわりの方です。大事にお育て下さい。」と言われたとのことでした。

大師が、十四才になられた頃、或る寒い夜、夢の中で仏様があらわれ、「お前は、観音

さまの生まれ変わった者である。西方の山にて修行して、さとりを開き、世の人々に徳をほどこすがいい。」とのお告げがあり、それから大師は毎夜ご両親にかくれて、西方の山、越知山へ修行に通い始めました。しかし、毎夜、大師が家を抜け出していかれるのを見て、不思議に思い大師の兄に後をつけさせましたところ、遠い越知山に登ることがわかりました。心配されたご両親は、前にお坊さんよりお聞きした話が本当ではないかとお考えになり、山頂に草ぶきの堂を建て行者生活することを許されました。

それから七年間、夏の日も、そして冬の夜も、その堂で修行されました。木の皮を衣とし、木の実、松葉さえ食べられ苦行し、仏の教えを自らさとり、かみをおとし、仏の教えをひろめ、世の人のために越知山を下山され、各地への行脚が始まるのでした。大師二十一才の時です。

今の坂井郡豊原で、今は石だたみの参道と石垣がその名残りをとどめています。其の頃、一千坊といわれ、にぎわいを歴史に残す豊原寺を建立されたり、遠くは富山県の石動山天平寺、そして今も有名な勝山平泉寺、白山の開山粟津温泉の発見、そして文殊山、日野山と次々に開山していかれたのでした。一方、九頭竜川、日野川、足羽川の三つの川や支流の水を治められ、鷹巣村糸崎寺を建立し、養蚕業の隆盛ならんことを祈願し、岡本村の製紙の指導、松岡での鋳物業、丹生郡の瓦づくり等、種々の産業をすすめて行かれました。

大師が四十一才の時、その時の天皇・元正帝がご病気になられたとき、呼ばれまして祈願いたしたところ、みるみるうちによくなりました。その功により神融禪師の号をいただきました。それから十数年後、大師五十五才の時、全国に「ほうそう」という悪病がはやった時、またまた時の天皇、聖武帝が大師に病氣退散のため十一面の観音様をつくらせ祈願させられました。そのため悪病も間もなく流行が止まりました。

その手柄に対して大和尚の号をいただき、名を泰澄とよばれるようになりました。この泰澄の名は、特に大師が天皇にお願いし、父親の名前、安角（や、すずみ）より泰澄（や、すずみ）をお願いしたところ、その親孝行に感心されて、お許しなされたとのことです。不思議なことに伝説では、大師のお名前がわからず、ただ「越の大徳」とだけ呼ばれていました大師も、はじめて泰澄大師と呼ばれるようになりました。

大師、七十七才となられ、大谷寺にお帰りになられるまで、石川県の那谷寺、滋賀県大津の岩間寺、近くは朝日観音福通寺、大安寺等、伝説によりますと四万ヶ寺の寺院の建立と、三万九千九百九十九体の仏像を彫刻されたといわれ、常に人のため、世の幸せをねがい、生涯を捧げ尽された方でした。越の生き仏、大徳の名がそれを物語っています。

大師、大谷寺にもどりましたが、北陸一円の信仰はこの大谷寺に集まりいよいよ栄えたと言われます。特にほうそうの悪病を退散させた大師の名は全国にひろまり、悪病防ぎの仏として参詣祈願する人が門前をにぎわしたといわれます。その大師も八六才、神護景雲元年（七六七年）三月十八日、お堂にこもり坐禅した姿のまま、お亡くなりになりました。この日、越知山の頂上に不思議な光を、はなち、しゃか堂ヶ谷の草木はすべて金色に輝き、空からは美しい蓮の花びらが降り続いたといわれています。

遺骨は石の棺に納められ埋められました。数百年後、元享三年九重の石塔が建てられ、大師の墓として現在にまで残り、いつの世でも徳をしのび香の煙が絶えませんでした。

泰澄大師霊跡の歌

一、越知山 おちこちの立ち木も知らず

わけのぼる

峰のあらしも のりの音かな

二、小金堂 この世から こがね堂へまいりつつ

ほとけのみゑを おがむなりけり

三、大谷寺 世をてらす 九重の塔にぬかづきて

大師のいさを たたえまつらん

大師讃仰の歌 延暦寺大僧正

いにしへの ゆかりかしこき越知山に

大師は永く 世を照らします

八百よろづ、神の冥加もあらたなり

伝えし秘法のりに いさみたまひて

越知神社

越知神社は、二分校の登山口より独鈷水まで二十町（二km）、それから頂上まで十五町（一、五km）あり、登山時間二時間、登りつめた所が越知山頂上であり、標高六百十二、八米、糸生地区第一の高山です。

そこに越知山道場、越知神社があります。伝説によりますと大師入山以前から越知大権現がまつられていたとも言われるし、大師が夢のお告げによりまつたとも言われ、判然とはしていません。

わが大師が十四才より二十一才下山するまで七年間の大谷寺と共に修練苦行の道場であり、それ以後も度々修業されたことは伝説のとおりです。

越知神社は三柱の祭神がまつられ本殿をはじめ、別山、奥の院と数々の社がまつられております。戦後大変荒廃しましたが、最近奉賛会、信仰者のお力により再興されております。尚、殿下、天ヶ谷方面より頂上まで自動車道が出来、参詣者には大変便利になりました。

頂上からの眺望はすばらしく、また本殿より奥の院に至る参道を散策したり、千体の石地藏、古い燈ろう、石仏を拝する時、遠い大師の時代に身を置くようで、この身が清められる感がいたします。

大師が越知山に修行に通われた時、毎日牛越坂を越えていかれました。天王から、牛越の間に、ところどころ、きれいな清水がでたり、岩の間より泉が出たりするところがあります。今は不動尊をまつつてあるところもあります。この清水は、大師が坂を越える人のために発見されたと言われています。

大師と糸生

大谷寺、越知山はもちろんのこと、糸生地区の一木一草に至るまで、大師とのつながりは深く、糸生の歴史は大師によってつくられたと言っても過言ではないと思います。その伝説をまとめて書いていきましょう。

大師が越知山に修行に通われた道は、三十八社より天王坂、中畑より牛越坂、そして野末、葛野、大谷寺へ、大谷寺より待ちの木峠、かくれ坂より森、小金堂、杖立より越知山へと通われたといわれます。そして大谷寺で亡くなられるまで糸生のすみずみまで歩かれた方ですので、千二百年後の今も色々の伝説が残っています。道順によりその主なものをお話しましょう。

一、牛越、尾ノ上神社の祭神

尾ノ上神社の祭神は、木造の不動明王で、泰澄大師の作と伝えられています。最初は尾ノ上という山頂にありましたが、不動尊とは威を持って仏法を導く仏であり、そのため、左手にけんさく（とらえる縄）を持たれ、右手に宝剣を持たれ、背に火えんを背負われ、恐ろしい形相をされ往来する人々を守り、法の道を教えたといわれます。そこで山頂より牛越坂の近くに堂を建てまつられ、何時の頃からか、現在の尾ノ上神社の祭神となられたとのことです。また安産の神としても尊とばれたといわれ、明治の世になるまで米一石（二俵半）をいただき、諸役御免という処遇を受けられたと伝えられています。

またこの牛越坂には、頂上に大きな一枚岩があります。昔はここが街道だったので、馬に乗って来られた人も、この岩だけは馬の足では登れません。そこで足にわらじをはいた牛に乗りかえて、この坂を越えていったといわれます。そこで牛越坂といわれるようになりました。尚、伝説によりますと岩の一方に南無阿弥陀仏、そして片方に南無妙法蓮華経とほられてあり、この岩を念仏岩とも言われています。

二、野末―葛野 経塚

野末から葛野に通じる古い道があります。この道は大師がひらかれた道で、今でも残っています。十四歳の大師が毎夜通われたのですが、大師がこの坂道を通られると、大きな白い蛇に道をふさがれお困りになりました。そこで大師は、きつと自分の修行をためされる神仏の化身であろうとお考えになり、川より小石を拾ってこられ、その石に一文字づつ、お経の文字をお書きになり投げたところ、白い蛇は姿を消されたといわれます。毎夜毎夜そのようなことが続き、いつのまにかその石の山ができました。後の人がこのことを知り、この石の山に石塔をたて、経塚と名をつけられ、今も道の南側に二十米程入った杉林の中にその塚が見られます。

三、小倉 蔵王山（蛇王山）

経塚より北の方に小高い山が見えます。この山が蔵王山です。大師は、この白蛇を神仏として祭ることをお考えになり、大師自作の蛇王権現さまをほられ、石堂を建てお祭りしました。後で小倉の方が木造で社を寄進されました。靈験あらたかで、如何なる難病も治ると伝えられています。今は織田―福井間の県道より歩いて十分程、参道も整備され、頂上には数百年の古木が林立しており、眺望もすばらしいところです。

四、大谷寺家老職安原五郎左エ門と小倉

平家の浪人安原五郎左エ門という人が、村上天皇の元暦元年の頃大谷寺に来られ、社領三万七千石の家老役となり、六百五十石の禄高で働かれました。それから代々二百二十五年間勤めました。家老役をやめられ、百姓になり、近くの山野を開墾し、田畑九十二石をつくり、一一七七年この地を小倉と名づけたといわれます。この安原家は今も尚続いております。

五、大谷寺 丸山

大谷寺にこんな話があります。大谷寺の一番上の方に丸山という所があります。その形は昔の古墳のようで、その上に五輪宝塔もたっています。その丸山という所は、泰澄大師をうめられた墓という話です。でも誰も本当かどうか知りません。今は道も広くなっていますが、昔はせまい道で草がはえ、大きな木があつて昼でも暗いところだったそうです。そして夕方になり暗くなる頃、この丸山から「しょうご」（お寺でつかう金）の音が聞こえて来たそうです。小さい子はその音を聞くととてもこわくて、家に早く帰りました。でもそれは、お寺のしょうごの音が山びこようになって聞こえたのかもしれない。

泰澄大師のお墓は、九重の塔となっておりますが、でも丸山にうめてあるのではないかと思います。小さい時に聞いた話ですが信じたいと思うのです。

六、野田、野村家の家紋

昔、野田に野村東兵衛という今の野村姓の祖先に当たられる方がおられました。

その方が、大師が越知山に修行に通われるとき今の経塚あたりまで毎日お迎えに行き、そして、けわしくうっそうとした昼でも暗い山道を道案内していかれたとことです。そこで大師が大変喜ばれ、「何かお礼がしたい。」といわれました。東兵衛さんは「それでは家の紋をいただきとうございます。」と申し上げると、大師は「わかりました。それではこれからカブトの紋を家紋としないさい。」と言われました。

近所の人が、なぜお金や土地をお願いしなかったのかと尋ねますと、東兵衛さんは「お金はいつかなくなり、土地もいつかは人の手に渡ることがある。しかし、家紋だけは永久になくならず、子孫に伝えられる。」といわれたとのことでした。

七、窪中野 不動尊の清水

窪中野より大谷寺へ行く道をしばらく行くと、ちょうど境に当たるところ、道より百米余り左の方、その山辺に大きな岩が見えます。その岩の中央のくぼみに不動尊が祭られその下より一年中どんな暑い夏もこんこんとつめたい清水が湧き出ています。

この清水こそ、泰澄大師が臨終の時、弟子がくまれてのまされたと言ひ伝えられる臨終の水なのです。後にここに不動尊が祭られ、今の世までもその名が残っています。

糸生に住む人々でも話には聞いておられても、実際に行かれた人は少ないのではないのでしょうか。苔むす不動尊の前に立ちますと、昔が偲ばれて身のひきしまる思いがし、遠い時代にかえった感じがします。

八、清水、待の木峠、かくれ坂

昔、畦高の方より上の部落の友達は、この坂を越して登校された方が多いと思います。私達も年に一度の越知山登山（七月十八日）には、きまつてこの峠を越して行ったものです。今は通る人として無い道ですが、この峠は大師が通われた道で、大師の兄、安方という人が父親に言われ後をつけられ、ここで大師の帰りを待ったので「待の木峠」の名がつけました。

また、大師の兄はここまで後をつけられ坂を下るところまで来ると、ふーっと大師の姿を見失ってしまったと言われ、不思議に思われ、それが毎日のように続いたので「かくれ坂」の名がついたと言われます。

九、森、杖立、小金堂

森という区の名は大師がこの辺一帯、うつそうと茂っていた森林を切り開かれ、この地区を森と名付けられたと言われたとのことです。

杖立は、よんで字の通り、越知山の登り口にあたるこの地です。杖を立てられ、帰りの時の道しるべにされたとのことでこの地名が生まれました。

今の二分校横に行者道の登り口があり、石の道標があります。越知山頂上への参道

はここより峰伝いに西へ西へと進みます。いくつもの峰を越し二時間程で頂上に登れます。今はこの道も改修され登りやすくなりました。

小金堂は、森から杖立に至る中程、越知川の左二百米の所に岩山があります。その中腹、岩に切り込むように石堂があり、その中に観音像が安置されていますが大師作だといわれています。古木茂り、苔が岩石を覆い千二百年の歴史がひしひしと感じられる金堂です。私が参詣した時は、柿が盆に盛られて供えてありました。

大師はここで山上を礼拝し修行された日もあったとのこと。この地域の方には、この堂をこもり堂、黄鐘堂ともいい、色々な伝説があります。その一つとして大師が、螢の光をあかりとしてお祈りをされたり、勉強をなされた話や、小金堂のある山には樺の木が多いのですが、白い花が咲いた樺の下には小判があるとか、小金堂とは堂の下にお金が埋められているからだとかの話が残っています。

十、小川、牛が窪、独鈷水

行者坂より登りはじめてちょうど中腹に、くぼんだ所があります。昔はよく夜修行のため登られた人が多く、ちょうど真夜中この辺を通ることになりますが、この窪みのところに、真っ黒な大きな牛が横たわって行者の道をふさぎ、じゃまされたとのこと。中には恐れて引き返す行者もいれば、かまわずふみ越して登って行く行者もありました。きっと神仏が、その行者を試されたもので、越して登った人にはそれだけの功德があったといわれます。

行者坂から登ること一時間余り、一段と急な坂道が続きます。その坂を登りきったところに独鈷水があります。巨岩が屏風のように立っていて周囲は数百年もの樹齢を数えると思われる古木が茂っています。この巨岩の中程の岩のわれ目の小さい穴のような所より、山頂近いというのに岩よりこんこんと清水が湧き出ているのです。この清水は大師が世の人々がこの坂道を登ることを考えられ、疲れをいやし、のどをうるおすために、祈りをこめ、杖とされていた独鈷で岩をつかれたところ、清水が湧き出たといわれます。

十一、小川、老婆と大師、殿池

或る日、大師が小川の村の中を歩いておられると、一人のおばあさんが、せつせと手よき（手おの）のようなものを磨いているのを見られて、「おばあさん、それをみがいて使われるのですか。」と聞かれましたところ、おばあさんは首をふり、「いやいや、これを磨いて針にするつもりです。」と答えたので、大師は大変驚かれ、この心があれば、どんな苦しいことも出来ないことはないと思われ、修行にはげまれたとのことです。

殿池、越知山の頂上にある池の名です。昔、織田信長がこの池に馬の鞍を沈め雨ごいをしたといわれます。それからこの池を雨ごいの池とも言われるようになりました。またその近くに古い井戸が残っています。大師が、神に捧げる水をと祈りになり井戸をほられるときれいな水が出るようになりました。六百十二米の山頂に井戸があったり、池があるのも不思議なことです。殿池は火山だった越知山の火口ともいわれています。

十二、真木、麻気神社

真木には、越知神社の分神として祭られてある麻気神社があり、それが真木の名のもとになったと言われます。またこの真木には昔から宮大工の立派な人が出られ、大谷寺大長院の建物も、越知神社も、この真木の方が建てられたと伝えられています。

十三、天谷の鉾泉

大師が越知山に苦行中、或夜夢の中で越知大権現があらわれましてお話されるには、「これ大師よ、この山の東の谷をおりて見よ。そこに塩池があり、その水で身を洗えばたちどころに萬病を治すことができること間違いなし。早々にためし、衆人に知ら

しめよ。」とのこと。大師が急いでおりて見ますとにわか雨となり、その雨の中から光るものが見えたので、近づいて見ますと、岩の上に金色に輝いている薬師如来像がありました。その岩の下からきれいな泉が湧き出ていました。

大師は早速、その水でお体を洗われると、疲れが一ぺんにとれ、肌につやが増しそう快になられたとのことです。そこで皆んなに告げられ、病人がぞくぞくと集まり、この水で身を洗うと朝日に霜のとけるように治っていったといわれます。それからこの谷を天谷というようになりましたが、後に地変があり、水の出が止まってしまいました。

大師が亡くなられてより千年後、天明二年（一七八二年）、天谷の百姓惣左エ門といわれる方が、大変越知大権現を信仰しておられましたが、或夜、夢の中に「我は越知大権現の使いなり、汝明日天が谷に行けば霊泉あり、この泉を汲み、病ある身をいやうすべし必ず奇特あり。」とのお告げがありました。しかし、本気に出来ずにおりますと、毎夜のように同じ夢を見、七度にも及びました。余り度々のことですので、谷へ行って見ますと、木像とも銅像ともわからない仏様が岩の上に座しておられ、その下より本当にきれいな泉がこんこんとわき出ていました。惣左エ門は大変な驚きようで、地に伏し涙を流して喜ばれ、早々にお堂をたてて、おまつりいたしました。それから現在まで二百余年、多くの病人を治して来ています。特に天谷の鉱泉は、やけど、皮膚病、けがによく効き、遠くにまでその名を知られています。

糸生小学校編「ふる里」

大谷寺物語

大師が亡くなられた後、大谷寺は、北陸の仏法の霊場として社領三万七千石十一院、三十三坊の寺々が建ちならび、参拝の人々で門前市をなし、それはそれは大変な隆盛振りでした。吉野朝時代、足利時代には僧兵さえおり全盛を極めたといわれます。

特に越前の領主、朝倉氏が栄えた頃は信仰も厚く領地も多く与えられておりましたが、世が戦国時代に入りますと、領主朝倉義影は織田勢に滅ぼされ、大谷寺もまた信長の兵火にあい焼失してしまいました。時に天正二年六月十八日（一五七四）、今から四百年前のことでした。

全盛を極めた大谷寺の当時の名残りが、門前の石垣、高台に残る仏像や、数々の遺跡、地名に察することができます。

大師が開山してより八百年に及んだ仏法の城もここに滅び果てることになるのではと思われましたが、しかし、信仰はこれを止めることは出来ず、天正十一年、丹羽長秀より信者に大谷寺、越知山参拝を許され、徳川時代になって、福井藩主、結城秀康より五十石の寄進があり、さらに、松平忠昌より宝永六年、五十石の加増を受けられ、百石の寺領となり、戦国時代以前のような華やかさはなくても、福井城主松平家の祈願所としてまた、信仰厚い人々の法燈はともし続けられました。

大谷寺のお開帳の歴史は大変古く、今から二百九十四年前貞亨元年三月三日より六月十八日まで、百日間奉修されたのが最初だと言われます。それから三十三年後大開帳、そしてその中間十七年目に中間帳が奉修されて来ました。

特に大師の九百八十年祭の大開帳はそれは盛大なもので、非常な賑わいだったとのことです。この時までは、女人禁制の寺でありましたが、お開帳の間に女の人々の参拝が許されたといえます。その時の歌に、

「おまえら、こんか、こんか大谷寺のお開帳、女郎が角力とる見ておいで。」

と大評判であったとのことです。

明治に入って、神仏分離といって、今まで神様と仏様を同じにまつてあった大谷寺も、寺と神社にわけられ寺領もなくなり、大師が開山してより千百年も続いた寺もついに哀れな廃寺となることになりました。もったいないことに、仏殿も荒れはて、子どもの遊び場となり、夜は狐や狸のすみ家となったとのことでした。

こんな時、本山延暦寺のお坊さんが、見るにしのびず、明治八年、大谷寺再建のため道款といわれるお坊さんを派遣され、区民、信者と協力して再建に努力されました。

しかし、この道款という人は病にたおれ亡くなりました。そこで次に道薫という人が来られ、前のお坊さんの意志をつぎ、苦心さんたん努力をされついに明治十二年、再興の認可がおりました。荒れ果てた大谷寺もここに目出たく再出発できました。しかし、一度荒れ果てたものを旧に復することはなかなかむずかしく、復興の苦難は現代の世にも続いているといわれます。

明治の終わり頃、仏像、仏具のことで、神社側と 寺側で争いとなり、ついに裁判となりましたが、寺の勝訴となり、大正二年越知神社の宝物も大長院の寺宝となり、七日間の大法要をし安置されたと伝えられています。(最近では昭和三十年に大開帳が行われています。)

その宝物の主なものとしては、三所大権現(大師作)・不動明王・泰澄大師木像・粟不動尊(大師作)・半作不動尊(大師作)・火徐歡喜天・蓮糸のまんだら(大師画)・大般若經六百卷入り二部・十一面観音木像(一部は福井市三崎医師奉納)六幅の軸物等である、その他、九重塔(大師墓)丸山五輪宝塔、大長院の正門(松平家寄進)も大谷寺の宝物だと思えます。

尚ここで、蓮糸でつくられた曼陀羅のその糸は大長院前の池の蓮からとられたといわれ、糸生の名もここから生まれました。それから、糸生小学校の校歌の蓮の糸生もまたここから生まれています。その蓮は大師が亡くなられた千二百年後の現在も美しい清らかな花を咲かせます。

今一つ加藤惇先生が糸生小学校の校舎前に建立された大師少年像も、このまんだららの絵の中の少年大師像を拝見して造られたとのことです。

糸生小学校編「ふる里」

糸生の伝説

一、横山と大城野

横山の集落は昔は大城野にあったと言われます。ところが江戸時代に入ってから村全体が焼失してしまつたらしく、現在のところに移つて来たと言われています。横山という名は横に高い山(鳥ヶ岳)があったからと言われています。

大城野は開墾する度に色々な土器がでます。また穴蔵というところがありますが県道

から南三百八十米程のところにある古墳です。横穴石室の円墳ですが、明治四十二年頃、水田を開こうとしてこの円墳を取り除こうと、大きな石をとったところ、さびた刀やかぶと等が出てきました。ところが、掘った人は原因不明の熱病にかかり、色々と医者に診察してもらったらしいのですが病いがわからず、人々からきつと、古墳のあたりではないかといわれ、急いで原形にもどしました。すると不思議に熱もなくなり、病氣も治ったとのことです。そこで今でもその話を村の人は信じ、それから後、誰もその内部を見た人はおりません。また、この大城野に昔から住んでいた人々は、新田義貞が福井で敗れましたが、その残党でありこの地へのがれて来た人だと言われます。

二、大畑の伝説

大畑は大昔、平家の落武者がこの地ににげて来て住みついたのではないかと言われています。それは、君（殿様）が使った清水といわれる「君清水」という名のついた泉もあり、城の北とか、墓谷とか、人の住んだと思われる名や跡が山頂近くに残っています。それから後、大畑に入って来たと言われる人で、北と姓を名乗っている家の祖先は小倉より来て大畑の北の谷に住んだといわれ、また鈴木という姓の家は、田中より移って来て、田中窪に住み、それから藤崎という姓の人達は、文殊山の麓から入って来たといわれています。

大畑に産神社があります。昔から医薬の神としてあがめられています。昔は田や畑の作物に虫や悪い病氣が来ても、薬も機械もなく、人々はどうすることもできませんでした。そこで虫よけ、病氣を防ぐ神としてご利益があり、方々からお参りする人が多く、色々な行事があったとのことでした。

またこの神社は女の方の安産の神として信仰が厚く、お参りする人が多かったと伝えられています。特に大畑からお嫁に行った人は神のお加護で誰もが安産であったそうです。これも医薬の神としての信仰から生まれたものでしょう。

三、野末の生立ち

野末はむかしは横山の一部であったそうです。それが明治維新の頃、分村して野末になったのです。以前は夏、冬のもりに、横山頭分四人、野末頭分二人で、いつも庄屋（区長）は横山から出ている、費用だけは横山へ三分の一納めていたので、大変不満だったので維新後はきつぱり分村して今に至っているとのこと。

四、小倉、朝倉義影と仏性寺

朝倉氏の祖先は坂井郡黒丸城にて甲斐氏の家臣だったので、応仁の乱（一四六八年）のたたかいに敵軍に寝がえりをして、今まで主君であった甲斐をおさえて越前の国の領主となり、一乗谷に城を移し、時の足利將軍の直参として、それはそれは栄誉栄華をきわめたと言われます。

しかし、その全盛も何時までもは続かず、一乗谷に移った（一四七一年）、朝倉敏景より五代目（氏景・貞景・孝景）義景の時代、足利氏の滅亡と共に義景も織田信長のため攻められ、ついに一族の謀叛により大野の寺にて悲壮な最後を遂げられました。その時義景四十一才、一乗谷時代の朝倉氏も百二年目（一五三七年）に滅亡したといわれます。

さて、仏性寺は今から千七十年の昔、大同元年（八〇六年）、道寛という人が草で庵を結んだのが開祖となっています。最初は真言宗でありましたが、六百年後（一四一四年）、日順僧都が法華経を学び、宗を法華宗にかえたと言われます。

次に、仏性寺と朝倉義影とのつながりですが、義景が織田軍を攻められた頃、仏性寺の僧に武運の祈願をたのみました。その願いが的中し、連戦連勝し、義景はその賞として石高十三石と諸役御免の許可証を授けました。また伝説によると、つり鐘も義景が寄進されたといわれ、世界大戦にも応召をまぬがれており、昔を偲ばせてくれています。

江戸時代に入って仏性寺はいよいよ栄え、寺勢は拡大興隆していき、檀家も七百余戸あったといわれます。寺は今の寺の西の方にありました。今は特に屋敷跡は見られませんが、墓石は今なお四、五十基あります。しかし、正徳元年（一七一一年）、同じ宗の平

井の寺との争いが起こり敗れました。そこで負けた者のみじめさで、どんどん離れていき、最後には四軒残っただけでした。

今は見るかげもない寺ですが、しかし寺内には仏像以外に義景の木像が安置されていますし、境内には先に書いた梵鐘、そして福井城主松平家の寄進されたといわれる山門、また、その山門横に弘治三年（一五五七年）の銘ある石の多宝塔があり、昔の栄華を残しています。

それに、年配の方々にはこの山門、石の宝塔を飾るように樹に苔むした名木「義景桜」と言われる枝垂桜がありました。毎年、春になると、古木いっぱい美しい桜花を咲かせ、それはそれは見事なものであり、ちょっと他に見られない品格のある桜でした。それが昭和四十年頃枯れたしまったとのこと、本当に淋しい気がします。

また、義景祭も、年配の方の中には懐かしい思い出をもたれる方がおられると思います。毎年八月十九日夜、盛大な祭が催され、義景の霊を祭り、盆踊りが行われます。それは賑やかな一夜でした。それも今はやんでしまいました。

なお、盆踊りとは亡者が地獄においてお盆の供養に歓喜する様子を踊りに表したものだということです。

ふるさとの資料の中に今一つ小倉の豊蔵城跡のことについて書いてありました。小倉の北の方の山頂に朝倉義影が織田軍の攻めを守るためにつくられた城で、その跡が今も残っているといわれます。

五、徳川吉宗と葛野

徳川幕府八代将軍、徳川吉宗は一六八四年、貞享元年十月二十一日、今の和歌山県、紀州藩主、徳川光貞の第四子として生まれました。小さい時の名を順六、少し大きくなって新之助、そして頼方と名をかえられ、十三才の時、越前国、丹生郡において三万石の所領を与えられました。しかし、頼方はこの地に来られないで、父光貞について参勤交代で江戸城に行かれました。

後に吉宗となられ、越前の領地は紀州藩の役人にやらせました。当時、役所を糸生の

葛野におかれまして、この役所を葛野陣屋と申し、今もその伝説が残っています。

葛野陣屋は、昔糸生村役場であったあたり、今葛野神社がある前のところにあったと言われます。今その頃の面影として残っているのが、昔から変らぬ一直線にのびる広い道路です。今でこそどの道も広くなっていますが、昔はこの葛野の道だけがどの道より広く不思議に思っていました。また、葛野神社に残っている葵の紋章（徳川家の家紋）も名残りの一つであり、神社にまつられているご神体も徳川吉宗の像だと言われております。また、道の横にある石でつくられている古い井戸もその昔陣屋の飲料水用に掘られらとのことです。このように葛野と、徳川吉宗のつながりは深いものがあつたことは間違いないと思います。

六、湯屋ヶ谷

大玉から萩野の方へ行く山道を一、五㎞程行きますと、もと湯屋ヶ谷という集落のあとがあります。昔はこの辺に湯が出たと言われ、そこからこの名前が出ました。本当に湯が出るのかも知りません。

でも山の中であり、大変交通の便が悪いため、昔五軒あつたといわれる家も、昭和の初めごろまでに方々へ移って行き、今はもう一軒もなくなり、集落は絶えてしまいました。

でも行ってみますと、山の中に今でも屋敷あととみられるものが残っています。

七、上糸生と八幡神社

上糸生には、桐が花、小島、中山、そして脇があります。桐が花は、八幡神社をこの地にお祭りしたときに桐の花が盛りだったので名がつき、小島は小さい島の多いところ、中山は中位の山だったので、それぞれ名がつけました。脇はそれらの脇にあるところなので、その名がついたと言われます。（でも後に下糸生の中に入れられました。）

八幡神社は昔、九州の宇佐八幡宮の定近といわれる神宮がこの地に流れつき、いつも

九州を思い出していましたが、或る夜の夢のお告げに、白ひげの老人があらわれまして、「この地に八幡さまをおまつりしなさい。」と言われました。そして天から八すじの糸が下って来たと思うと目がさめたとのことでした。この糸が糸生村の名のはじまりだとの説もあります。

そこで村人達の協力をえて、この地に八幡神社が建てられたと伝えられています。明治の終り頃、上糸生地区にあるすべての神社の祭神をこの八幡神社に合祀され今に至っています。

其の内、清水の神社だけは、ご祭神（薬師如来）を八幡神社におさめ、お宮はそのまま残され八王子社として清水の氏神様となっています。

八幡神社の伝説としておもしろい話が残っています。

それは、昔権兵衛という人がいましたが、悪道ひどくある年の寒い夜、寒さしのぎにと、こともあろうに八幡神社の五体ありました。ご神体を薪のかわりにし、二体をもやし、三体の手足を切り火中に投じたとのことでした。するとたちまち、天罰にあい自分も火中に入り焼死し家も焼けてしまいました。そして屋敷跡に残った岩を権兵衛岩といわれ、明治二十年頃まで怪火が時々あり、人々に恐れられていました。その頃、道路改修によって岩がとり除かれてからは怪火は止んだといわれます。

また文久三年に大火がありました。おそのという女の人が一番に神様にかけつけ、御神体をひなんいたしました。氏子の人達は神様もえてしまったと思いましたが、助かったことを知りそれはそれは喜んだとのことでした。

このようなことがあってから、ご神体は杉の木でつくられていたので、氏子の人々はそれから杉の下駄は用いないようになったとのことでした。

八、糸生の歌舞伎

およそ四百年前、朝倉義影の祈願寺となった、小倉の仏性寺に領主の代参として重臣だった前波九郎兵衛（石高七万五千石とも言われる）という人が時々お参りになりました。この人は家老職までやられたとも言われる方で、下糸生にも居住されたとも言われ

ます。朝倉氏が織田勢に攻められ、天正二年（一五七〇年）姉川の合戦（滋賀県）で敗れた時、戦死されました。

その方は武将でありながら、能舞の名手でもあり、代参の時、また下系生に居住された時、下系生の館氏や、上系生の若者にこの能舞を教えたのが糸生歌舞伎の始まりだといわれます。これが大へん盛んになり、舞台でもその名が広く各地に伝わりました。しかし残念なことに、前波氏が姉川の合戦で戦死されたとの報を受けた館氏は、わざわざ一乗谷の前波家を弔問し遺骨を戴き、お墓を自分の屋敷に建て霊を弔いました。この墓も下系生の樋の上に残っており、また能舞伎（のむき）と名づけられ、舞台屋敷跡も残っています。

それからこの能舞に芝居を入れて歌舞伎として演ぜられるようになり、当時楽しみのない人々に大変喜ばれ、歌舞伎の全盛時代となり江戸時代、明治、大正、昭和と続いていきます。その内最も盛んだったのは明治、大正、昭和の初め頃だったと言われます。

糸生歌舞伎の師匠として有名な方々は儀兵衛、四右エ門、古崎松五郎（庄右エ門）、渡辺立吉氏ときいています。その中でも古崎松五郎氏は門弟三百人からおった大師匠であったと言われています。

演ずるなかで、十八番とするものに、忠臣蔵、太閤記、阿波鳴門等で、現在五十才以上の方には、今でも小さい時八幡神社のお祭りに境内の舞台で、子どもにはむずかしい歌舞伎を見た記憶が残っておられると思います。

最後に師匠になられた、松村嵐氏も昭和三十一年十月、引退芝居をされ、それから火の消えるようにその名も聞けなくなりました。本当に伝統ある芸術を、今一度再興してほしいとみんなが切望しています。

九、天谷陣屋、東二ツ屋金比羅山

江戸時代の頃、天谷に陣屋（役所）がありました。この陣屋は本保陣屋（武生市本保）の今でいう出張所のようなところで、役人が二人、そして小使いが一人おられ、この地

方を治め、もめごと、争いごと等が起きると簡単なことはこの陣屋で裁いたとことです。場所は天谷の中程にあったと言われます。

この天谷から東の方3km程、山を越して入っていきますと、糸生の桃源郷ともいわれる東二ツ屋があります。今は天谷から入り立派な道がありますが、昔は杖立から金比羅山に登る細い山道があり、その中間に三屋敷というところがあり、そこに二ツ屋の祖先が住んでいたといわれ、それがいつの日にか今の二ツ屋に住みつかれたといわれます。

ここは昔から、越廼、国見の浜から福井へ通ずる近道で、多くの人々が往来しました。その頃は十数軒家がありましたが、それも他に道ができ人も通らないようになり、また不便な所なのでいつのまにかへり、現在では三戸程になってしまいました。でも今行って見ますと、栗林、水田が開け、自然の環境もよく、電気も発電され、車も入り住むには大変よいところのように感じます。

この東二ツ屋に金比羅山があります。一八五三年、今から百二十年程前、東二ツ屋の宮崎氏が、区の総代として、四国の金比羅山に参詣し、ご分霊を奉迎し、三百四十七米の丹尾山頂上に社をつくり、奉祭されたとのこと。これよりこの山を金比羅山と言うようになりました。その頃は、浜から福井への通路でもあり、また海の神様でもあり、多くの方々がお参りしたと言われます。

糸生小学校編「ふる里」

ふせり行者

泰澄大師は、福井市麻生津の人です。若いころから丹生郡越知山に登って仏法の修行をしていました。泰澄にはひとりの弟子がありました。ふせり行者といい、一千年もの長い間野に伏せて、泰澄が世に現れるのを待っていて、弟子になったのです。

越知山の頂上からは、日本海を通る船がよく見えます。そのころは北の国から都へ送る品物は、みな船にのせて日本海を通りました。そのような船が通ると、ふせり行者は、修行に使うはち（鉢）を、越知山の頂上から海の上の船まで、鳥のように飛ばせて、少しばかりの食べ物ほどこしてもらいました。日本海を通る船の人はこのことをよく知

っついて、二人分の食べものをはちにいれると、はちはまた空中を飛んで越知山へ帰りました。

あるとき出羽の国（秋田県）から米を積んだ船が来ました。船長は浄定という人でした。ふせり行者のはちが飛んできたけれども、

「この船の米は、税として政府へ納める米であって、その数量はきちんと定められているので、たとえ修行をしている坊さんであっても、ほどこしてあげることはできない。」
と行って、はちの中へ米を入れないで、そのまま通り過ぎようと思いました。

はちは、からのまま越知山へ飛び帰りましたが、ふしぎなことに、その船に積んでいた米俵が、まるでかり（がん）列のように、一俵一俵連らなって、はちのあとを追って空中を飛んでいったのです。

浄定は、これを見て、びっくりぎょうてんしました。急いで船を岸につけ、山を登って泰澄大師の所へ来ました。

浄定は、

「この米を失っては、わたしは罪を受けます。どうぞ返してください。」
とたのみました。

泰澄大師は、

「それは、ふせり行者がしたことであろう。ふせり行者の所へいったのみなさい。」
と答えました。

浄定は、ふせり行者の所へ行ってわびると、

「おまえは、わずかの供養をおしんだから、こらしめただけや。全部返してやる。」
といました。あたりを見回すと、飛んで来た米俵は、峰々谷々に散らばって落ちていて、取り集めようもありません。

「これはどうしたらよからう。」

と浄定が、とほうにくれていると、ふせり行者は笑って、

「お前は船に帰っておれ。わたしが送り返してやる。」
といました。

浄定が船で待っていると、米俵はまた、一俵一俵かのように連らなって、空中を飛

んで船へ帰って来ました。浄定は、このふしぎに感動して、都からの帰りに、越知山に登って、泰澄大師の弟子になりました。これをきよさだ行者といいます。

資料 福井のむかし話

きよさだ行者

むかし、天皇が病気になられました。いろいろ医術をつくし、名僧に加持（祈り）をさせましたけれど、少しもよくなりません。

ある夜、看護の人も寝入ったところ、天皇のまくら元が明るくなり、老人が現れて、「天皇のご病気は、はなはだ重い。越前の国に越知山という山があり、ここに泰澄という名の行者がいる。この人を招いて祈禱させれば、なおるであろう。」と告げました。

天皇が、

「あなたは、どなたですか。」

とたずねると、

「わたしは、かの山のふもとの劍の神である。」

と答えて、消え失せました。

天皇は、さっそく中臣連を勅使として越前に下向（都から行くこと）させました。勅使は、まず劍神社に参拝したうえ、その神主の案内で越知山に登り、室堂（坊さんの修行する岩屋）へはいました。中に三人の坊さんがいて、ひとり二十歳ばかりの若僧、他のふたりは四十歳を過ぎた中年の僧です。

勅使は年長のふたりの僧に向かい、

「泰澄と申すお方は、どちらのお方ですか。」

とたずねました。すると意外にも若い層が、

「わたしが泰澄である。」

と答えました。

勅使は、天皇の病気が重いこと、劍明神のお告げがあったことを述べて、

「都へ出て、天皇のご病気がなおるご祈禱をお願いします。」
とたのみました。

泰澄は承知して、ふせり行者ときよさだ行者のふたりを連れて都へのぼりました。
宮中では、紫宸殿に壇を作って、祈禱の準備がしてありました。泰澄が調べてみると
さんこ（三つまたになったきね）という仏具が用意してありません。

泰澄はふせり行者に、

「すぐ越知山にもどって、室堂からわたしのさんこを持って来なさい。」

と命じました。宮中の人は、

「今から越前まで仏具を取りに帰らせるのでは、とうてい、きょうあすには祈禱できな
いだらう。」

と内心笑っていました。

ところがふせり行者は、日ぐれどきに出発したのに、その日の夜八時ごろには、もう
もどって来ました。あまりのことに宮中の人は、おどろき恐れしました。

それで宮中の人は、泰澄のほかにもふせり行者も、壇上にあげて、祈禱してもらいま
した。

きよさだ行者は、役がないので、ご殿の柱によりかかって眠っていました。すると、
きよさだ行者が寝息を、はいたり吸うたりするたびに、ご殿の柱が動き、それにつれて
ご殿全体が地震のようにゆれ、屋根の石がわらがみな下に落ちました。

この大ゆれで、宮中の人が、あわてふためいてにげ回っただけでなく、天皇に取りつ
いていた邪霊（悪いたましい）もゆり出されました。そのとき泰澄は、持っていたさん
こですかさず天皇のお体をなでたので、邪霊は追っ払われ、ご病気はすっかりなおりま
した。世の人はこれを、きよさだ行者の振力といました。

資料 福井のむかし話

夜泣き石

越知山へ登る途中に大きな石がある。この石の上に登ると、馬の泣き声で泣くという。

資料 福井県の伝説

ごぜん水

越知山頂上の室堂の前にごぜん（御膳）水または神供水と称する井戸がある。むかし泰澄大師が神に供えるため、祈願してわき出た井戸である。今はこの神供水をもって温泉浴場を設け、登山参拝者に入浴させている。神経痛、脳病に効験がある。

資料 福井県神社誌

慶松堂

福井の人金慶松（けいまつ）は、深く越知山を信仰した。ある日小川を経て、ふもとの森を過ぎるころ、急に病気になるって、その場に伏して、起きあがれなかった。のち慶松は、一堂宇をここに建立して、いつでもここで山頂を拝して帰った。慶松はいずれの登山口から登っても、同じ病を起した。よって、どの口から登っても、慶松堂が建ててあった。

資料 越前若狭の伝説

剣神社

天正のころ織田町の剣神社が兵火によって焼失した為、その末社である境野・茱原両区に神体を移したという。

資料 常磐郷土誌

若宮神社

むかし花原村にあちち四郎兵衛という人がいた。彼は乗馬が好きで、乗馬ご免の身分であったが、島崎にある若宮神社前を通るたびに、いつも落馬した。四郎兵衛はこれを若宮神社の神の仕わざと大いに怒り、ご神体を天王川に捨ててしまった。

朝日町天王の金巻清右衛門家の四代前の主人が、ある夜夢の中で、七郷のユ（せき）

に金色さんらんたる神体を拝した。翌朝ただちにわが家の下のユに出てみると、はたして一体の神体が、砂上に流れ着いている。拾い上げてわが家に安置した。やがて後の山に鎮座する雨夜大明神の社殿に合祭して、日夜供養した。

明治の世になり、花原区では、四郎兵衛が捨てた神が天王区に拾われてあるのを知って、返してもらいたいと、たびたび天王区へ頼みに行ったが、ここにおりたいとの神のお告げによって、今日までそのままになっている。

明治四十二年に雨夜大明神も八坂神社の境内に移されたので、この若宮神社もともに移された。現在本殿の西側に建てられてある別社の中に、小さい三つの社殿があり、中央が雨夜大明神、西が若宮明神神である。岩上に片ひぎをたててすわっている武神で、右手にやり、左手に宝塔を受けている。たけは三十五センチほどである。

栞原区には現に若宮という地籍がある。当時若宮の社地は一十坪あった。

資料 常磐郷土誌

滝つぼの経文

天王川より百メートルばかり上がると、糸生谷口の滝がある。その滝つぼには経文が沈めてあるので、その上流では不浄物は洗うなとされている。

資料 常磐郷土誌

源が山

上かいち西が谷のため池の西の方の山を源が山という。源氏の墓のあったところで、今も五輪石がところどころにある。

資料 常磐郷土誌

岩が谷

天正の一向一揆の乱に、区民が横山谷の岩が谷へ避難していたので、さらやはちなどの破片がある。

資料 常磐郷土誌

からすが岳

旧糸生村との境のからすが岳は、千七百年忍熊（おしくま）王が、ここに立てこもっていた賊徒を攻め亡ぼされた所である。柴原区のくらが谷の奥「いにがく」を越えせ、山頂に広いところがある。水もあり、南日を受け、幾十人が生活していても、誰にも知られぬくつきょうの場所である。

資料 常磐郷土誌

城谷

青野区の城山に頭谷区から登る谷を城谷といい、この谷をはいって左手の小谷を城が平という。登り道の杉やぶに馬踏み（他でいうくらどめの意）という地籍があり、鎌倉時代にこの城に登る武士が、ここまで乗馬できて、ここで馬をとめておいたので、この地名が生れた。

資料 常磐郷土誌

二月十五日の祭

当区ではむかし若い男を怪物の人身供養にした。村ではこの哀れな男を神と祭り、毎年二月十五日に祭りをする。当日は、その前年に子どもを産んだ家が、米一升をたいて握り飯をつくり、区長から清酒一升を神前に供え、各戸が参拝して、酒と握り飯をいた

だくのが慣例である。子どもの生れなかった年には、各戸から米を集めている。

資料 常磐郷土誌

秀吉のたばこ盆

豊臣秀吉が、藤井吉左衛門家に来られたとき、たばこ盆を賜った。同家にはこのたばこ盆のほかに、庄屋のときに使ったといわれる五つ珠が二段の、長さ三尺ばかりの、ふたつきの大そろばんがある。

資料 常磐郷土誌

直線の村境

慶長検地のとき、丹生山地に基準となる大縄（なわ）を三本東西に入れた（見通すこと）。それは天津村在田区と神山村広瀬区及びその中間の常磐村である。その縄入れは、過去の自然な境界を全く無視したもので、頭谷区と蚊谷寺区の村境は、山以外の蚊谷寺区側の田畑の真中を走っている。これが今も、蚊谷寺区と頭谷区との境界をなしている。鯖江市当田町北方の火葬場近くと二丁掛町の間一本杉があり、その杉が縄をたぐったように生えている。これは当時の検地の大縄が、その杉の下に埋めてあるのだという。

資料 常磐郷土誌

鎌田屋敷

平家の軍勢は、くりから峠で木曾義仲と戦い、敗走した。平家の侍大将の大窪鎌太（おおくぼかまた）は、武士がいやになり、途中で一行から離れ、天王川をさかのぼって、この地に来た。ここに館（やかた）を築いて居住したのが、鎌田屋敷である。

一説には、十二世紀ごろ鎌田正家が青野の大窪地籍に城を構えていた。源義朝の旗あ

げのとき、これに組したが、長田（おさだ）の庄司（しょうじ）の天井落としの湯で殺された。それでこの城も一代限りであった。

資料 常磐郷土誌

城山

鎌倉時代に鎌田正家が城を築いた。青野区の民家の南側に高く丸くそびえ立つ山で、頂上に幾段も地ならした平地がある。そこに穴天井という場所があり、長さ二メートルもある大きな石のといのようなものがある。この井戸はむかしこの城に水がなくて落城する際に、まだ水はこの通り豊富だとばかり、つるべに白米を入れて引上げ、馬の背に打ちかけ打ちかけ、洗ってやるさまを、下の敵に見せた所である。

資料 常磐郷土誌

鐘が淵

村内に鬼人がでて困るので、からすが岳に時刻をつげる鐘を設置して、暮れ六つの鐘を合図に皆が家に帰った。鎌田正家没後、敵にこの鐘を取られるのを残念に思い、鎌田屋敷の北側にあるふちに投げ入れた。それからこのふちを鐘がふちというようになった。また百年ほど前までは、ここへ雨ごいをし、清浄な水おけなどでおおぜいの人が水をくみだし、鐘が見えたらこれに網をつけて引けばかならず雨が降ったという。当時近郷近在から見物にくるたくさんの人出を目当てに売店が出来たともいう。

郷土となった鎌田屋敷の野武士たちは、しだいに勢力を張り、当時織田郷におった織田勢（織田信長の数代先祖）と結ぶようになった。ある時、青野勢は留守居に老人や婦女のみをおいて、織田を越えて梅浦の方に討伐に向かった。ところが盟軍であるべき織田勢が、このすきをねらい、一時に青野館（やかた）に攻め寄せた。青野館留守居勢は不意を突かれ、たちまちやかたは焼かれてしまった。責任者は腹を切り、奥方は以前よりたいせつにしていた鐘をかむり、裏の深いふちにみずから身を沈めたという。このふ

ちを鐘がふちと称している。

資料 常磐郷土誌

寺屋敷

鎌田屋敷主従の願い寺と伝えられ、その東北方の川向かいにある。現在数多くの五輪塔があり、土器や古銭も出土している。

資料 常磐郷土誌

おんぼ谷

鎌田屋敷で死んだ人を葬ったところで、菜原区の下方、こうぞ原の小谷をいい、屋敷からは天王川を西に渡ったところである。

資料 常磐郷土誌

なたが淵と布が淵

鐘が淵の上流のナタの形に似た淵をなたが淵といい、その下に布が淵がある。ともにその伝承は不詳である。

資料 常磐郷土誌

佐々木家

青野区に佐々木小左衛門という旧家がある。大窪鎌太の従者で、世盛りのときは、青野村から花原村まで我が土地ばかりを踏んで往復ができたといい、春の桜花のときは、家の郎党を連れて、城山に酒さかなを運び、花見の宴を開いたと伝えられる。この花見は佐々生村の藤田大門（次右衛門）、岩永村の内藤清太夫の三家が、毎年さきを競っている。

た。青野村は福井藩で、領主を招待できたのは小左衛門家ばかりであったという。

資料 常磐郷土誌

性付け坂

鎌田屋敷の二男千代丸は、荒々しく、毎夜屋敷から山一つへだてた峠に現われ、通る人を切つて、死体を鐘が淵に投じていた。村の人は、うわばみが出るといつて恐れ、夜間の通行は全くとだえた。

そのころ日修上人（日蓮の高弟）が佐渡から京へ上る途中、この村に來た。村人の嘆きを聞き、一夜この峠に登り、法華經を誦（じゆ）していた。金千代丸は、これを殺そうとして近寄つたが、日像の崇高な姿に打たれ、そのひざ元に伏して前非を悔いた。日像は、この法力の功德を一切衆生に施したいと思ひ、峠の岩壁に七字の題目を刻みつけた。これが題目岩である。

資料 常磐郷土誌

人皇第百五代正親町天皇天正のころ（一五七三ころ）この街道を往来する者は、かならずここで妖怪のために正念を失ひ、迷わされたので、ここを通る諸人に性（しょう）をつけて通れと、注意するために性付け坂と名付けた。そのころ日修上人という学徳すぐれた高僧が、北陸巡教のおり、里人の願ひによつて、妖怪退治のため、一岩石に南無妙法蓮華經の七文字を刻んだという。それ以来妖怪魔物の所為がことごとく消滅して、安らかに往来することができるようになった。

昭和十三年この岩を妙祐寺境内に移して、保護することになった。

資料 御題目岩之由来

音無川

天王川が青野の神社の横を流れるあたりを音無（おとなし）川という。むかしここに寺があつた。天王川の早瀬があまり物すごい音を立てるので、寺の住職は夜も安眠でき

ず、日中の勤行にさしつかえた。それで住職は七日間日夜読経して祈願した。そのため満願の日には川瀬の音がやみ、水がよどんでいた。それ以後音無川というようになった。

資料 福井県の伝説

白山神社の横を流れる天王川は、三町ほどの間音一つ立てず流れるので、越前の不鳴（ならず）川と命名された。むかし宮で説教された弘法大師が、高い流れの音を一かつ（喝）して静まらせたという。

資料 常磐郷土誌

金谷茶がま

むかし金谷には金が出て、それで茶がまを造った。その金の出たところは、今の金谷区の東側のため池の底に当たるところである。当時は八十軒も家数があったという。

資料 常磐郷土誌

相撲取天保山

相撲取天保山は吉田奥佐エ門方に生まれ、身長六尺二寸（一・八メートルぐらい）、体重三十六、七貫（一三五〜一三九キロぐらい）もあった。相撲はあまり上手でなかったが、身体が大きいので、「越前大関」の名を得た。全盛時代は明治十年から二十年ぐらいで、加賀や越中でも越前関天保山の右に出るものがなかった。「北陸関」とも呼ばれた。揚げ相撲は明治二十四年ごろであった。のち吉田郡松岡町で死亡した。松岡町の寺に彼の墓がある。

資料 朝日町史

幸若音曲（舞）

今から六百年ほど昔、南北朝時代に越中の国守であった桃井播磨守直常の孫直詮は幼

名を幸若丸といい、少年の頃比叡山にかくれ、ひそかに武芸を修めていた。

ところが幸若丸は天性の美声で天台声明の節で平家物語などの軍記（いくさの話）を語る事が上手で、いつのまにか一山の好評判となった。このことを時の帝後小松天皇がお知りになって、宮中に召されたところを深く感激されて、その賞として桐の紋を用いることをお許しになった。

幸若丸はその後越前に下り、白山権現にこもって、芸能をみがき、その奥儀をきわめた。そして文安五年（一四四八）にいたって今度は後花園天皇に召された。天皇はひどく感心されて采地（領地）十数町歩、大小の鼓、幸若太夫安直の号、幸若音曲の名をたまわり、その上末代まで諸太夫に列するとの勅命をいただいた。

幸若丸直詮は、文明二年（一四七〇）五月二日に一乗谷で死亡、その地の古道場にはうむられた。直詮も動乱の京都をのがれて、朝倉氏に身を寄せた一人と考えられる。またその後つぎが朝日町西田中に住みついたのは、たぶん領地があったからであろう。

幸若音曲は、戦国武将の好みにかない、大いにもてはやされた。ことに織田信長の愛好したことは史上有名である。豊臣秀吉もまたおなじ、徳川家康もこの音曲を庇護、時代によっていくらか増減はあるが、一族に一千石あまりを扶持（あたえる）している。

西田中に住む幸若一族は、八郎九郎（北家）弥治郎（上出）小八郎（南家）の三家に分れ、この三家にはそれぞれに「裏」ととなえる同族があり一門郎党大集落をつくって、西田中は小市街として栄え、明治維新にいたった。なお延宝五年（一六七二）小八郎の次男久次郎が敦賀に一家をたてた。

幸若一族は、将軍家につかえる芸能家として格式高く、一子相伝的な秘芸として、他に芸を伝授することをしなかった。このことは今も敦賀に残る稽古場（土蔵造）が、かく他にもれないような構造になっているのをみても、思い半ばに過ぐるものがあるろう。だから明治維新にいたって三主家がばらばらになるとともに、当地における幸若音曲は、まったくその姿を消してしまった。こうして朝日町では、幸若音曲は再びみることできない「まぼろしの芸能」といわれてきた。

ところが、はるか九州の地に、その種が、今日に伝わっている。福岡県山門郡瀬高町大江の、国の重要無形民族文化財「幸若舞」がそれである。

この幸若音曲には二流あって、即ち一つは、直詮直系に属する越前幸若音曲で一つは、直詮長女の婿である安義の弟子山本四郎左エ門が創めた幸若音曲の支流大頭流である。

世人は往々この二つを混同して同一音曲なりと思惟されるが、大頭流では音曲と舞踏とを併せ演ずるが、本家たる越前幸若では決して舞踏しないと言うのが大きな相違点である。

同地の伝承によれば、「後柏原天皇の北面の武士山本四郎左エ門が越前幸若家からこの芸を習った。この人は天性異相『大頭』で音声も大きかったので世人『大頭』と呼んでいた。」この人の流れを大頭流という……

この大頭流が九州の地に伝えられ柳川藩立花侯に庇護されて、明治維新にいたり、それ以来保存会の人々のご苦労によって今日にいたっている。なお大江では越前幸若家のように秘伝的でなく、早くから家元制をしいて、芸能の保存につとめている。

資料 朝日町教育委員会

朝日観音

朝日村にある。別当は真言宗の福通寺である。泰澄大師の開基である。立木をそのまま観音像に作った。高さ一八〇センチばかりの十一面観世音の立像である。彫刻のとき朝日が輝いて尊像のみけんを照らすさまが常と異なったので、堂を朝日堂といい、その在所を朝日村といった。

資料 越前国名勝誌

泰澄大師が、立木のまま彫刻をした高さ六尺余の観世音菩薩の立像と高さ五尺ばかりの多門増長二天の木像を安置してある。また本堂の南には千手観音堂がある。

元正天皇のころの朝日山に悪魔が住んでいて、里の人々を悩まし、殺された者もたくさんあった。養老元年（七一七）に泰澄大師が修行の道すがら、たまたまこの辺を通ると、はるか西に薄気味悪い雲が、山々をおおうていた。大師はこの山に登って、山腹にくすの大木があり、そのかたわらに一つの岩穴があるのを見つけた。この岩穴にはかならず魔神が住んでいるのであろう。これを退治して、人々の悩みを救いたいと思い、三

七日の間聖観音の秘法を修めて、祈念した。ところが不思議にも、このくすのきから光明を放ったので、大師は大いに喜び、悪魔降伏のため、この大木に一刀三札をして、聖観音菩薩の像を彫刻し、一つの堂を創建して、ここに安置した。この像の開眼のときは、みけんから光明を發し、四方に輝くことあさひのようであったので、この山を朝日山と名づけ、里を朝日村というようになった。

なお大師は、同じ年の山ごもりのとき、夢の中に千手観音が現れて、「お前の願いにより、わたしは長くこのところにあって、一切衆生の災難を除く、また五穀成就のため稲荷八幡を彫刻して、当山の鎮守とせよ。」とお告げになった。大師は喜んで、翌朝同じくすの大木で一刀三札して千手観音像を、同木の枝で稲荷八幡を彫刻した。

資料 福井県の伝説

阿弥陀如来由来

福通寺に安置してある阿弥陀如来は、四十センチの座像で、昭和四年、某寺の懇請で同寺へ遷座することになり、先方の住職が奉持されたところが、その晩、福通寺住職の夢枕に阿弥陀如来が立たれ、

「吾縁有りて四十余年前、当福通寺へ来れるものなり。依って吾他へ移るを好まず。必ず共に此の地に於いて衆生済度をなさん。」

との御告げに、早速檀家の老人に聞くと、全くその通りで、大変驚くと共に、直に先方の寺へこの由を話に赴いたところ、

「道理で不思議だと思いました。あの日は俄に頭が重くなり、とても阿弥陀様を御奉持する事も出来ず、知人の宅へ仮安置した訳だが、それでは早速御帰山を願います。」とのことで、心から恐縮し、再び福通寺に安置して今に至っている。

資料 朝日山正観音菩薩参拝の栞

竜宮が淵

越知山から流れ出る川は、天王村の山際で淵となる。水青くあい(藍)のようである。この上で正月十六日および七月十六日竜灯が燃えることがある。

その下にえぼし岩というのがある。岩の下に穴があつて、水上から流すたき木が誤つてこの岩に当れば、そのまま穴へはいつて、ふたたび出ることがない。故に名づけて竜宮が淵という。

資料 影響録

註

宝泉寺区から天王川を五百メートルほど川上にのぼるとある。この淵に六〇センチほどの大きなこいが群をなして泳いでいる。淵の中央に岩がある。しかし竜灯など燃えない。鳥帽子岩はさらに百メートルほど川上にある。

資料 朝日町史

産れ石

八坂神社(牛頭天王社)鎮座の初めに、一の神門の礎から天然に石が生れ出た。その神門は天正のころ退廢して、礎のみ残っていた。その後そのそばに今の石の鳥居を造営したとき、またも昔の礎から美しい石が少しあわれ、しだいに太ってきて、天明四年(一七八四)正月中について産みはなした。母石はそのままにして、子石は玉がきの内に移し、うぶ着という桜の木を植え、神威の隆盛をお祝い申した。

資料 越前国名蹟考

飛鳥井桜 (薄黒桜)

飛鳥井(あすかい)中納言雅縁(まさより)は官職をやめて後、仏道にはいり宗雅と号した。彼はこの地で出生したという。応永三十四年(一四二七)都を出て、氏神であるこの天王社に参拝した。

資料 越前国名勝志

そのとき植えた桜が神社にある。もとの木は枯れたが、その子孫が今も繁茂している。花は淡紅で、黒色を帯びているので、薄墨桜という。また飛鳥井が植えたので、飛鳥井（あすかい）桜という。

参照 飛鳥井雅縁（朝日町上川去）

資料 丹生郡誌

尉が峰

尉（じょう）が峰は、畑時能の居城であった。栃川に馬所（まどこ）という家号の家があるが、ここは軍馬をつないだところであるという。

資料 朝日村誌

篠虫神社

仁賢天皇には仁王子・賢王子ふたりの王子があったが、武烈天皇によってこの地に流罪になった。ふたりはこのささ原へ上がってなくなられた。ふたりをお祭りして、一方を長岡八幡、一方を篠虫（ささむし）神社とした。

参照 継体天皇（一）（福井市・越前全般）

資料 剣神社盛衰記

褐鉄鉞

佐々牟志（ささむし）神社の境内の土の中には褐鉄鉞がまじっている。村の人はこれを天狗がまいた砂といっている。

資料 朝日村誌

佐々牟志神社のヒイラギ

この樹は、社殿の前方方向かって右側に栽培されている。樹勢は旺盛である。測定の結果は、目通りの周囲一、二六メートル樹の高さ八メートル、枝張り東西五、七メートル、樹令は明らかでない。本県では稀に見るヒイラギの巨樹である。

資料 朝日町誌

佐々牟志神社の横穴

独立状の神社本殿の旧参道と、町道との交叉点の山裾に造営された、小規模な横穴の一種と思われる。表土は風雪のため荒廃し、天井の一部が崩れ落ち発見されたものである。入口の穴の広さ約八〇センチメートル、奥行は深く最近青年団が調査した記録では、二、三〇メートル奥には広い場所があつて、一段高くなり、そこから二又に分かれているが、それより奥は未調査であるという。歴史的意味、性格は明らかでないが、付近は遺跡の分布する地帯で、全山を精査すると、まだこうした横穴が発見される可能性が高い。

資料 朝日町誌

飛鳥井雅縁

飛鳥井家の先祖雅有から雅敦まで十代の間この田中郷を領有していた。中にも河去村には別荘があつて、歌人雅縁（法名宗雅）はこの地で生れた。館の遺跡、大門、小門などの地名が残っている。春日神社のそばに宗雅の宮というのがある。昔から氏神としてい

る。

参照 飛鳥井桜（朝日町天王）

越前国名蹟考

朝日町区名のおこり

東二ツ屋

杖立から金比羅山へ登る途中に三屋敷というところがある。昔そこに二ツ屋の先祖がいたらしい。ところが金比羅山の山津波で押し流され、二家族が峠を越えて現在の二ツ屋に落ついて住みついたという。

天谷

旧幕時代においては江戸旗本小林の領分であった。初めは天谷駒新治郎大庄屋として領分を支配していたが、大庄屋は隔年ごとに江戸に左勤する定めであったから、その煩に堪えないので後に至って天谷区に陳屋を設けた。

真木

集落の名称は昔麻気（まけ）と呼称していたらしい。これがなまって「まき」、明治以降は真木となっている。

杖立

泰澄大師十四才の時、越知山に上り修行された。登り口に当たるここに杖を立てて帰路の標識にせられた。

森

泰澄大師が三十八社から越知山へ登り修行のため通われた当時は、この辺一帯が森林

であった。後ここを切り開いて人家ができ字名を森と名づけた。

清水

集落内にきれいで冷たく夏でも水の切れない清水のわき出るところがあるので集落の名にしたという。

大玉（いかだま）

大玉区中央県道沿いにジバン字番地籍に大玉とか坪の内などの名があるところからみると集落ができた時に当時の住民が大玉という名にしたのではないかと思う。

上糸生

白糸のようなものが天から下って来たので糸生八幡宮と称するという。また一説には、この地に産したはずの糸をとって、織田の地で織り、釈迦涅槃（ねはん）図を作った。よってこの地を糸生（いとう）という。この涅槃図は剣神社に所蔵されている。

（福井県の伝説 安井美輝子）

大谷寺

今から千二百年前白鳳時代泰澄大師によって開かれた山岳仏教の発祥地越知山をはじめ越知山修業者の修練場として大谷寺大長院がある。

中野

当区は周囲山に取り囲まれ中が窪み昔は一帯が野になっていたので窪中野と名づけたという。しかし今は単に「中野」という場合が多い。

小倉

安原五郎左エ門所蔵「五郎左エ門尉知定いわれ書によれば、人皇六十二代村上天皇の御代元暦元年、平家の浪人五郎左エ門尉知定というものが大谷寺に来て越知山三万七千石社領の家老役となり、六百五十石を得て大長院山内におくった。それより二百二十四年人皇八十代高倉天皇の御代家老役を辞し、百姓となり、浜辺の山野を開墾して田畑九十二石をこしらえ、もって高倉治承元丁酉年（一一七七）その地を小倉村と名づけたといわれる。

牛越

古老の伝えによると、お天王様（天王区白山神社祭神）が、お流し者にお会いになった時、四カ浦に漂着せられ、牛に乗ってこの地をお越しなされ、田中に行かれ後に天王の地に移られた。それでこの地を牛越と名づけたという。

横山

横山はかつて奈良時代から江戸時代の初期ぐらいまで、現在の大城野にあって、その土地の西南に比較的高い山、烏ヶ岳があるので、横山という集落名がつけられたという。

境野

当区草分けの山口長左エ門は宮崎村蚊谷寺区の神社の「御鍵持ち」という良い家柄の分家という。何代前に出られたかは蚊谷寺区に大火あり、当家にも文献がないので明瞭でない。当時の蚊谷寺区は今の境野区の土地も所有していた。長左エ門はその村境に来て、そこを永住の地と定めた。これが境野区及び区名のおこりである。

茶原

茶原の地名は茶の木が多数あったところから名づけられたという。

頭谷

蚊谷寺から山越えしてここに移り住み、谷の頭に集落をつくったので頭谷と名づけたという。

青野

平坦で広いところからこの名が生まれたという。

金谷

金谷茶釜という有名な茶釜の産地として往時は茶えたそうで区名もこれに由来する。

朝日

「二日堂と朝日の地名の由来」参照

西田中

もと印内といったが、元禄十四年（一七〇二）に西田中と改称した。印内の地名については、いろいろにいわれているがつまびらかでない。西田中とは東部田中に対してつけられた。

氣比庄

氣比庄の地名は氣比神社に因み命名したもので古書にその名の見えたのは、建久二年（一一九一）殿下処分帳に氣比庄とあるのをはじめとする。

市

市は往時蔬菜類などの市場があつたのでこの名がある。

田中

田中は四面田をめぐらし中央に集落があるので名づけたという。

宝泉寺

宝泉寺はもと天王に含まれていたが後分立して一集落となった。往古、現今の実相寺の位置に宝泉寺という寺があつたが、いつのころか廃寺となる。すなわちこの寺名を採って大字に名づけたのである。

天王

天王は祇園天王宮（牛頭天王宮ともいう。今の八坂神社を指す）を鎮座する土地であるので名づけられた。

乙坂

「乙坂のおいたち」参照

佐々生

佐々生は佐々牟志の転訛で、佐々牟志神社の名にちなんで命名したところである。

岩開

岩永、開発の両集落はも一つの村であったが、のち分立して二集落となった。すなわち「康正二年造内引付」の妙法院領の部に岩永村、開発村と分記してあるので明らかになる。その後合併して一村となり、慶長三年（一五九八）太閤検地の時は両大字を一村として調査を受けた。しかし後また岩永、開発と分立して長く続いた。岩永、開発は昔から何回も離合したが、耕地整理を契機として昭和三十、三十一年ごろ合併し現在の岩開となった。

上川去

上川去は、今の吉川村下川去の大字に対して名つく、天王川は応永年中（約五百年前）の古図によれば、内郡、上川去を経て下川去の辺より田中に向け曲折して流れていった。すなわち下川去の川上の位置にある集落であるため上川去と名付けたのである。

資料 朝日町誌

越前・若狭の伝説

むかし話がでてきそうな項目

岩窟（天谷）、藤の木（真木）、宿の堂（杖立）、泉養寺の屋敷跡（清水）、豊蔵城跡（小倉）、大杉（境界）、下糸生浄勝寺の道場跡（菜原）、榎の清水（青野）、越前長塚（金谷）、郡栄塚古墳、条理制あと、足利義将の館跡、郡山金比羅山（内郡）、朝日山古墳（朝日）、気比庄梨（気比庄）、市姫塚（市）、坂田九良左エ門屋敷跡、自然居士墓（宝泉寺）、祇園

祭礼、天王陳屋（天王）、茶臼山城跡、秋山如林居住地（栃川）、芝築地山城跡（乙坂）、
八王子山古墳、延暦寺皎然と三床山城跡烟火塚（佐々生）、三村家の土塁（岩開）、杷柳
（上川去、内郡、糸生）

編集後記